

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第22集

はる つじ
原 の 辻 遺 跡

原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅲ

2001

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第22集

はる つじ
原 の 辻 遺 跡

原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅲ



芦辺町不條地区・石田町原ノ久保地区調査区全景（南から北を望む）



大川地区 8 区検出状況



不條地区調査区全景（南から）



不條地区 1号溝検出状況（東から）

発刊にあたって

本書は、平成7年度から国庫補助を受けて実施している原の辻遺跡発掘調査事業の平成12年度の報告書です。

原の辻遺跡は、日本最古の船着き場を始め、大陸や朝鮮半島との交流を物語る数多くの遺物が出上ることや、大規模な多重環濠が集落を巡ることなどから、『魏志倭人伝』に記載された一文國の王都と特定され、平成9年9月国の史跡指定を受けましたが、さらに今回は、わが国の弥生時代を解明するうえで希有な遺跡として、平成12年11月24日「特別史跡」の指定を受けました。弥生時代の集落遺跡としては全国で3番目ということで、その重要性が高く評価され、誠に喜ばしい限りであります。

本遺跡は、播磨川下流域に形成された深江田原の平野に、面積約100ヘクタールの広さに及び、計画的な発掘調査が進められ、これまでに大きな成果をあげてきました。今年度の調査は、史跡指定外の区域について実施しました。丘陵部南側にあたる石田町大川地区・原ノ久保地区と北側の芦辺町八反地区です。

大川地区は平成10年度の調査で初期貿易陶磁や土師器に混ってイスラム陶磁が1点出土し、古代の公的な施設が存在した可能性を示唆しました。今回は1箇所から古代に関連する遺物が確認されました。しかし、さらに重要な発見がありました。それは今まで南側で発見されていなかった濠が確認されたことです。弥生中期の遺構で、今後の調査でどの方向に進んでいくのか期待されます。

原ノ久保地区では、平成8年度に調査した墓域の範囲を確定する目的で調査区設定をしました。住宅地の中では、かなり旧地形が削平を受けていましたが、まだ部分的に残っている所もありました。また少し離れた西側の水田の調査区からは、前回より古い弥生中期の墓地も確認することが出来ました。

不條地区では、これまで確認されていた濠や溝のつながりをさらに確認することができました。

このように、継続した調査によって新しい発見もあり、当時の状況が少しずつ明らかになってきました。遺跡も一段と重みを増してきました。これからも調査は続けられますが、一地域に埋没することなく、東アジア史の視点で調査研究を行い、地域に根ざした整備活用を図ってまいりたいと考えております。

原の辻遺跡の調査成果が、学術資料として活用され、文化財の愛護に役立てていただければ幸いです。

平成13年3月31日

長崎県教育委員会教育長 木村道夫

例　　言

1. 本書は、国庫補助を受けて平成7年度から実施している原の辻遺跡発掘調査事業の平成12年度分の発掘調査報告書である。
2. 調査は、芦辺町教育委員会と石田町教育委員会の協力を得て、長崎県教育委員会が主体となって実施したものである。
3. 本書に収録した現場担当者は（ ）内に記した。また、執筆者については本文冒次の項に示した。
 - ①不條地区　　（担当者　町田利幸・杉原敦史・藤村　誠）
　芦辺町深江鶴亀触字不條
 - ②大川地区　　（担当者　安楽　勉）
　石田町石田西触字大川
 - ③原ノ久保地区　（担当者　安楽　勉）
　石田町石田西触字原ノ久保
4. 本告関係の出土遺物と図面および写真類は、長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所に保管している。
5. 本書の総編集は安楽が担当した。
6. 本書で方位の基準としたのは磁北である。図ではM Nの略字を使用した。

調査関係者は以下のとおりである

調査担当　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
調査組織　所　　長　　田川　　肇
　　課　　長　　安楽　　勉
　　課　長(兼)　町田　一久(壱岐教育事務所)
　　係　長(兼)　長岡　正記(　　タ　　)
　　主文化財保護主任　町田　利幸
　　主文化財保護主任　村川　透朗
　　文化財保護主任　杉原　敦史
　　文化財保護主任　藤村　誠

本文目次

I 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境.....	1 (藤村)
2. 歴史的環境.....	2 (タ)

II 調査の経緯

(1) 平成7年～平成11年度の調査.....	5 (安楽)
(2) 平成12年度の調査.....	7 (タ)

III 調査

1. 不條地区の調査

(1) 調査概要.....	8 (藤村)
(2) 基本土層と遺物.....	10 (町田・藤村)
(3) 遺構・遺物.....	15 (タ)
①溝.....	15 (タ)
②土壙及び柱穴.....	21 (タ)
(4) 小結.....	41 (町田)

2. 大川地区的調査

(1) 調査概要.....	51 (安楽)
(2) 土層.....	51 (タ)
(3) 遺構.....	55 (タ)
(4) 遺物.....	55 (タ)

3. 石田町原ノ久保地区の調査

(1) 調査概要.....	58 (タ)
(2) 土層.....	60 (タ)
(3) 遺構.....	60 (タ)
(4) 遺物.....	64 (タ)

IV まとめ.....72 (タ)

挿図目次

第1図	対馬島・壱岐島断面図	1
第2図	壱岐弥生時代遺跡分布図	3
第3図	原の辻遺跡概要図	6
第4図	不條地区調査区位置図	8
第5図	タ 洪積区配置図	9
第6図	タ 1層出土遺物	10
第7図	タ 2層出土遺物	11
第8図	タ 2層出土遺物	12
第9図	タ 2層・3層出土遺物	12
第10図	タ 土層及び造構配置図	13
第11図	タ 3層出土遺物	15
第12図	タ 1号溝・2号溝実測図	16
第13図	タ 1号溝出土遺物	17
第14図	タ 1号溝出土遺物	18
第15図	タ 2号溝出土遺物	19
第16図	タ 2号溝出土遺物	20
第17図	タ 2号・3号・4号・5号・6号土塁実測図・土層図	22
第18図	タ 7号・8号・9号・10号・11号土壤実測図・上層図	23
第19図	タ 12号・13号・14号・15号土壤実測図・土層図	24
第20図	タ 16号・17号・18号・21号・23号土壤実測図	25
第21図	タ 22号土壤実測図・土層図	26
第22図	タ 24号土塁・柱穴61・柱穴71実測図・上層図	27
第23図	タ J号土壤出土遺物	29
第24図	タ 1号土壤出土遺物	30
第25図	タ 3号土壤出土遺物	30
第26図	タ 4号土壤出土遺物	30
第27図	タ 5号土壤出土遺物	31
第28図	タ 7号土壤出土遺物	31
第29図	タ 8号土壤出土遺物	31
第30図	タ 9号土壤出土遺物	32
第31図	タ 10号土壤出土遺物	32

第32図	不條地区11号土壙出土遺物	33
第33図	タ 12号土壙出土遺物	33
第34図	タ 13号土壙出土遺物	34
第35図	タ 14号土壙出土遺物	35
第36図	タ 15号土壙出土遺物	35
第37図	タ 16号土壙出土遺物	36
第38図	タ 18号土壙出土遺物	36
第39図	タ 21号土壙出土遺物	36
第40図	タ 22号土壙出土遺物	38
第41図	タ 22号土壙出土遺物	39
第42図	タ 23号土壙出土遺物	40
第43図	タ 柱穴91出土遺物	41
第44図	大川地区調査区域図	52
第45図	タ 7・8・9区土層及び遺構図	53
第46図	タ 7・8・9区出土の遺物実測図	56
第47図	タ 出土遺物実測図	57
第48図	原ノ久保地区調査区域図	59
第49図	タ 11・12区出土遺構及び土層図	61
第50図	タ 10区出土小児葬棺実測図	63
第51図	タ 11区出土小児葬棺実測図	64
第52図	タ 10・11区出土小児葬棺実測図	65
第53図	タ 12区出土石棺墓実測図及び土器実測図	66
第54図	タ 10・12区出土遺物実測図	68
第55図	タ 11区出土遺物実測図	69
第56図	タ 4区出土ガラス玉実測図	69
第57図	タ 地区出土石器実測図	71

表 目 次

第1表 壱岐弥生時代遺跡分布図.....3

図版目次

- P L 1 不條地区調査区全景航空写真
- P L 2 調査区全景（南から）・調査風景・調査風景・1号溝検出状況（東から）
1号溝横断土層・1号溝遺物出土状況・2号溝横断状況（東から）・2号溝横断土層
- P L 3 2号溝遺物出土状況・4号土壤横断上層・6号土壤横断上層
9号土壤遺物出土状況・10号土壤横断土層・10号土壤遺物出土状況
11号土壤横断土層・11号土壤遺物出土状況
- P L 4 12号土壤遺物出土状況・13号土壤横断土層・13号土壤遺物出土状況・16号土壤遺物出土状況
21号土壤横断土層・21号土壤遺物出土状況・22号土壤横断土層
22号土壤遺物出土状況
- P L 5 23号土壤横断土層・23号土壤遺物出土状況・24号土壤横断土層
柱穴51石製基礎検出状況・柱穴61横断土層・柱穴71横断土層
11号土壤イノシシの歯出土状況・3層出土遺物
- P L 6 遺跡遠景（西から）
- P L 7 大川8区漆検出状況・大川8区漆北側土層
- P L 8 大川9区漆検出状況・大川9区漆東側土層
- P L 9 原ノ久保10区西側土層・原ノ久保11区東側土層
- P L 10 原ノ久保11区遺物出土状況・原ノ久保12区遺物出土状況
- P L 11 原ノ久保11区土器出土状況・原ノ久保7区漆検出状況
- P L 12 原ノ久保10区小児甕棺墓出土状況（上面）・原ノ久保10区小児甕棺墓出土状況（下面）
- P L 13 原ノ久保11区出土小児甕棺墓（上面）・原ノ久保11区出土小児甕棺墓（下面）
- P L 14 原ノ久保12区石棺墓出土状況（上面）・原ノ久保12区石棺墓出土状況（下面）
- P L 15 大川8区遺物出土状況（手前は漆上面）・原ノ久保8区土層
- P L 16 大川8区漆調査風景・原ノ久保11区調査風景

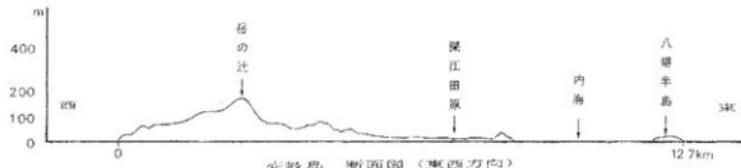
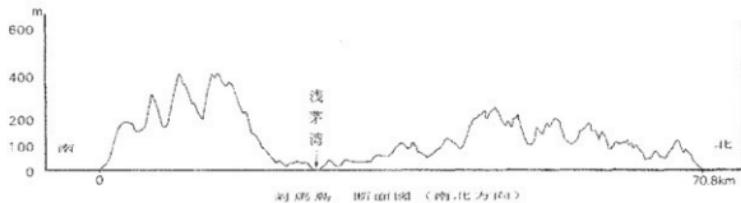
I. 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

玄界灘に飛び石のように浮かぶ壱岐島は東西約15km、南北約17km、面積約138km²、対馬とともに長崎県に属し、人口は約3万5千人の島である。朝鮮半島釜山から対馬までは約52km、対馬から壱岐及び壱岐から福岡県博多までは約67km、壱岐から佐賀県唐津までは約26kmの距離に位置する。福岡県博多港とはフェリーで約2時間半、ジェットフォイルで約1時間、佐賀県唐津港とはフェリーで1時間で結ばれている。長崎県への海上交通アクセスはなく、行政的には長崎県に属するものの文化的・経済的には福岡県との繋がりが深い。

島は全体が平坦な溶岩台地で、起伏は少なく最も高い岳の辻でも標高は213mにすぎない。現在島の面積の30%が耕地で森林は35%。険しい山々からなり森林が島全体の90%を占める対馬とは地理的に同じような位置にありながらも好対照をなしている。島の基盤は古第三紀層で、玄武岩がその表面を覆い、弥生時代以降の箱式石棺や古墳石室の石材として利用されている。離島であるがゆえ自然環境の破壊は都市部ほど進まず、歴史・文化の研究フィールドとしてはとても有効な場所である。

『魏志』倭入伝には「・・・耕田猶不足食・・・」とあるが、島南東部の「深江田原」は県内第2の沖積平野で、有数の穀倉地帯となっている。原の辻遺跡はこの平野の中に南北方向に舌状に突き出した台地（標高8~18m）と現在の水田面（標高5~7m）からなり、遺跡の範囲は約100ha（福岡ドーム約30個分）である。遺跡北側には全長約9km、島内最大の轄鉢川が東西に流れ、東は約1.5km離れた内海（うちめ）に注ぎ、西は郷ノ浦方面へ続いている。また、遺跡の位置する「深江田原」は冬になると強い北西の季節風が吹くことでも知られている。



第1図 対馬島・壱岐島断面図

2. 歴史的環境

玄界灘に浮かぶ壱岐島は古くから対馬とともに大陸や朝鮮半島との人的・物的な交流拠点として、また防衛上の要衝として歴史的に重要な役割を担ってきた。ここでは弥生時代を中心に原始・古代の壱岐島の状況について述べてみたい。

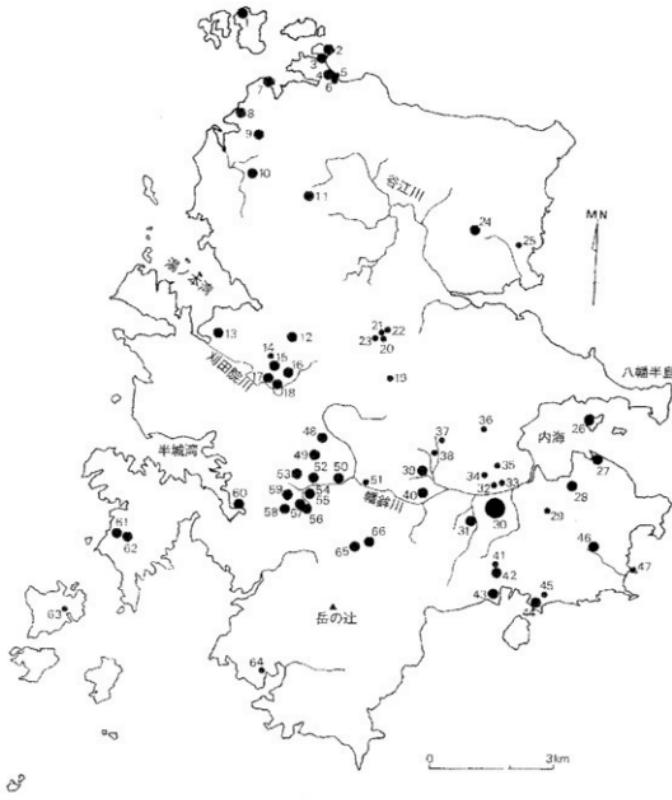
旧石器時代の遺跡は原の辻遺跡・奥原遺跡など確認されているものはわずかである。縄文時代の遺跡も実際に確認されているものは7遺跡程度で、その大半が干瀬になって遺跡が現れる潮間帯遺跡である。それに対して弥生時代の遺跡は第2図に示した66ヶ所が確認されている。弥生時代の遺跡分布の特徴として、縄文時代の遺跡が壱岐島西側の海岸部に集中しているのに比べ、弥生時代の遺跡は壱岐島全体に広がっている。これは漁労・採集を中心とした社会から農耕社会への変化に対応したものとも考えられる。また、弥生時代の遺跡の多くが島内を流れる河川の流域に多く見られるのも特徴の一つであろう。ただし第2図からもわかるように谷江川流域には遺跡が立地していない。これは島の北東部は発達した海蝕崖で湾入が少ないと、また島の中央部が低地帯として壱岐島最大の穀倉地帯となっているのに対し、島の南北は表面を玄武岩で覆われた低平な溶岩台地となっているという地形的な問題からだと考えられる。

壱岐が初めて歴史に登場するのは3世紀の中国の歴史書『魏志』倭人伝で、その中に「一支国」として記載され、弥生時代終末期の壱岐の状況が紹介されている。「(對馬國から)南に渤海という海を渡り、千余里行くと、一大國(一支国)に着く。長官は卑狗、副官は卑奴母離と呼ばれている。広さは四方三百里ばかり。竹木・叢林が多く、三千ばかりの家がある。やや田地があるが、食べるには足らない。南北に海を渡って米などを買ってくる。」短いが当時の壱岐を知る貴重な記述である。

壱岐島内では遺跡の範囲、出土遺構・遺物の質・量とともに群を抜き、平成7年、「倭人伝」に記された一支国の拠点集落と特定されたのが原の辻遺跡である。集落の形成は弥生時代前期末に始まり、弥生時代中期前半には多重の環濠を巡らし大集落として整備され、その後古墳時代前期に集落は解体していくようである。調査の進展によって台地を巡る多重の濠は勿論のこと台地北西低地部では「倭國乱る」の影響とも考えられる環濠の再整備や、環濠のさらに外側に掘られた濠群も確認されている。また、遺跡内の台地頂上部では高床式建物の存在を想定させる柱穴群の発見、台地西側では東アジアでは最古の船着き場跡の発見、同じく台地西側での水田畦畔造構の発見など時代に対応し計画的に築き上げられていった一支国の正都としての姿を徐々に現してきた。

また、現在までに環濠内に1箇所、環濠の外に5カ所の墓域も確認されている。墳墓の形式は北部九州系の成人用墓塚は少なく、主体となるのは箱式石棺墓・土壙墓である。石田大原・大川・原ノ久保A地区の墳墓からの副葬品からは王族級の有力な集団の墳墓の存在も伺える。なお、第2図中の鶴田遺跡・閑塚遺跡も原の辻遺跡関連の墓域と考えられている。

原の辻遺跡の出土遺物で特に注目されるのは大陸・朝鮮半島系の遺物の豊富さである。五銖銭・貨泉・大泉五十などの中国前漢や新時代の貨幣や朝鮮半島系無文土器・楽浪系滑石混入土器・楽浪系瓦質土器・三韓系瓦質土器・陶質土器、規矩鏡・獸帶鏡・内行花文鏡などの中国鏡、戦国式銅剣など



第2図 岩岐弥生時代遺跡分布図

第1表

遺跡名	種別	位置	時期	発見者等	遺跡名	種別	位置	時期	発見者等	遺跡名	種別	位置
1 佐賀島石器群	石器	佐賀島	中期	佐賀島	大河内石器群	石器	佐賀島	中期	佐賀島	佐賀島石器群	石器	佐賀島
2 ナイフ状遺跡	骨器	白井町	中期	白井町	支那山遺跡	土器	支那山	中期	支那山	支那山遺跡	土器	支那山
3 丹波川下流域遺跡	住居跡・工具類	丹波川下流域	中期	丹波川下流域	土器	丹波川下流域	中期	丹波川下流域	丹波川下流域	丹波川下流域	土器	丹波川下流域
4 丹波川下流域遺跡	遺物	丹波川下流域	中期	丹波川下流域	土器	丹波川下流域	中期	丹波川下流域	丹波川下流域	丹波川下流域	土器	丹波川下流域
5 ヒシヨウ海岸遺跡	居住跡	糸井十郷	中期	糸井十郷	土器	糸井十郷	中期	糸井十郷	糸井十郷	糸井十郷	土器	糸井十郷
6 宮ヶ原石核群八重原	石核	南平	中期	南平	石核	南平	中期	南平	南平	南平石核群	石核	南平
7 三村遺跡	遺物	三村	中期	三村	土器	三村	中期	三村	三村	三村遺跡	土器	三村
8 1 大石遺跡	遺物	大石	中期	大石	土器	大石	中期	大石	大石	大石遺跡	土器	大石
9 ソノノ遺跡	遺物	ソノノ	中期	ソノノ	土器	ソノノ	中期	ソノノ	ソノノ	ソノノ遺跡	土器	ソノノ
10 稲葉遺跡	遺物	稻葉	中期	稻葉	土器	稻葉	中期	稻葉	稻葉	稻葉遺跡	土器	稻葉
11 長丸遺跡	遺物	長丸	中期	長丸	土器	長丸	中期	長丸	長丸	長丸遺跡	土器	長丸
12 遠見遺跡	遺物	遠見	中期	遠見	土器	遠見	中期	遠見	遠見	遠見遺跡	土器	遠見
13 阿波遺跡	遺物	阿波	中期	阿波	土器	阿波	中期	阿波	阿波	阿波遺跡	土器	阿波
14 年神遺跡	遺物	年神	中期	年神	土器	年神	中期	年神	年神	年神遺跡	土器	年神
15 鶴鳴遺跡	遺物	鶴鳴	中期	鶴鳴	土器	鶴鳴	中期	鶴鳴	鶴鳴	鶴鳴遺跡	土器	鶴鳴
16 オツカラ遺跡	遺物	オツカラ	中期	オツカラ	土器	オツカラ	中期	オツカラ	オツカラ	オツカラ遺跡	土器	オツカラ
17 船形遺跡	遺物	船形	中期	船形	土器	船形	中期	船形	船形	船形遺跡	土器	船形
18 ハナノ遺跡	遺物	ハナノ	中期	ハナノ	土器	ハナノ	中期	ハナノ	ハナノ	ハナノ遺跡	土器	ハナノ
19 谷汲遺跡	遺物	谷汲	中期	谷汲	土器	谷汲	中期	谷汲	谷汲	谷汲遺跡	土器	谷汲
20 大河内2遺跡	遺物	大河内	中期	大河内	土器	大河内	中期	大河内	大河内	大河内遺跡	土器	大河内
21 大河内1遺跡	遺物	大河内	中期	大河内	土器	大河内	中期	大河内	大河内	大河内遺跡	土器	大河内
22 月隈遺跡羽庭原	遺物	月隈	中期	月隈	土器	月隈	中期	月隈	月隈	月隈遺跡	土器	月隈

※上記分類及び一括表は平成6年3月刊行の「岩岐弥生時代遺跡調査報告書」(第12号)を基に作成した。(岩岐市考古委員会)を元に作成した。

枚挙に暇がない。さらに、船着き場に使用された敷葉・敷粗朢工法は現代の土木技術とも相通するハイレベルなもので、こういった大陸系の遺物や高度な建築・土木技術は、自ら海を渡った人々や対馬海峡を渡りこの地を訪れた人々との活発な交流によってもたらされたものに違いない。

島内で原の辻遺跡以外の重要な集落遺跡としてはカラカミ遺跡と車出遺跡が知られている。刈田院川の中流右岸に点在する遺跡群の中心がカラカミ遺跡である。原の辻遺跡と同じく弥生時代前期末から集落の形成が始まったようで、高地に位置するものの、環濠が巡っている。朝鮮半島系の瓦質上器や楽浪系滑石混入器の出土は大陸との頻繁な交流を物語る。獸骨を利用した鉗・ヤス・アワビ起こしなどの漁労関係の遺物が多く、漁労や交易に従事した集団の基地的な集落であった可能性が強い。また方格規矩鏡や銅鏡が出土、卜骨も出土するなど原の辻遺跡との類似性は大きいが、集落の規模が小さく、遺跡群の中心集落ではあるものの、原の辻遺跡の集団よりも階層的に下位にあったと考えられる。

幡鉢川上流の遺跡群の中心が車出遺跡である。車出遺跡の位置する柳田地区は壱岐西部で比較的まとまりのある平野部が形成され、その中にあたる鉢形山には旧式内社で壱岐一の宮と称される天手良男神社が位置する。大陸との交流を示す遺物として方格規矩鏡・貨泉が出土している。また祭祀的な性格を持つと思われる土器溜やト骨も確認されている。最近の調査結果から隣接する田ノ上遺跡や鉢形山遺跡なども車出遺跡の範疇としてとらえ、当時の一支国内の有力な集団がここにも存在したとも考えられる。しかし原の辻遺跡と同じ水系で直線で約5km程上流であること、また集落の形成時期が弥生中期であることから、何らかの理由で原の辻遺跡から派生した集団によって集落が営まれた可能性が強いと考えられる。一支国を形成する集落の一つとして、ここにも有力者層が存在し、北から南に深く深入した半城湾を意識し、島の西側をかためるための役割を果たしていた可能性もある。

対馬、そして朝鮮半島を臨む島の北端部にも多くの弥生時代の遺跡が点在する。中でも注目に値するのが天ヶ原セジョウ神遺跡である。護岸工事中の発見のため出土状況はわからないが、海岸の石祠の下から三本の中広形銅矛が出土している。これは、対馬に次ぐ国境の島としての外敵の侵入を防ぎ、航海の安全を守るという壱岐島の役割を我々に示している。

古墳時代になると壱岐には県内の半数以上の264基もの古墳が築造される。5世紀後半に築造されたとみられる大塚山古墳は、原の辻遺跡を見下す山の上に築かれ、この地を生活の基盤とした豪族の墳墓と考えられる。しかし、その後約1世紀近くの空白を経て巨大な古墳が島の中央部に多く見られるようになる。壱岐島の穀倉地帯を捨てて何故この地に移ってきたのか詳細はわからない。全長91m、県内最大の前方後円墳である从六古墳や石室内に船の線刻が見られる鬼屋庄古墳、金銅製の飾り金具をつけた馬具の出土が中央政権との関わりを示唆する籠塚古墳など、壱岐の古墳を代表する巨石墳が群集している。律令制下では国に大・中・小国の等級があり国司の定員などが決められ、壱岐・対馬は下国とはいえそれぞれ一つの国として扱いを受けた。当時の壱岐島の居館跡と嶋分寺が置かれていたのも島の中央部で、古代においてこの地は交通の要衝として重要な地域であったと思われる。

壱岐島は同境に近いため人的・物的交流の最前線であるのは当然のことながら、外敵の侵略に対しても大きな危険にさらされることになる。1019年、女真族刀伊が50隻の船で押し寄せ、壱岐の島は甚大な被害を被った。

II 調査の経緯

(1) 平成7年度～11年度

原の辻遺跡では、昭和49年度に実施した緊急調査によって弥生前期末から中期にかけての墓域が発見されて以来、昭和50～52年にかけての範囲確認調査を行い、台地の広い範囲に遺物が見られることが確認された。それ以降「幡ヶ浦流域総合整備計画」に伴って丘陵部をとり囲む低地性水田部まで調査が拡げられ、内濠、中濠、外濠をもつ多重環濠集落であることが明らかになり「魏志倭人伝」に記された「一支国」の王都と対応された。

しかし、遺跡の広さは100haにも及ぶと推定されたため、より詳細な遺跡の内容把握に努めることになり、平成7年度から国庫補助事業による範囲確認調査を進めることとなった。平成7年度は原地区の丘陵部頂上部分と、大川地区の墓域が調査された。丘陵部頂上部は原の辻遺跡の中核部分と考えられている地域で、祭祀場跡が明らかになっており、さらに祭祀建物群が検出された。居住関係では、弥生中期～古墳前期の堅穴住跡と弥生前期末の土器が出土したことから、この時期まで居住があつたことが判明した。また溝も東西方向に走り区域を区切っていることも確認した。墓域は昭和51年度の範囲確認調査で弥生中期末～弥生後期末の箱式石棺墓、土壙墓、小児塚棺墓などが検出され、鉄製鎗、ガラス製勾玉などの副葬品が出土している。その後の畠地の深耕でも船形鏡や有鉤銅劍、ガラス玉多数が採集されている。調査では、箱式石棺墓5基、小児塚棺墓7基、溝状遺構などが検出され、副葬品として鉄劍、鉄鏃先、着玉製管玉、ガラス製小玉などが出土している。

平成8年度は原地区の丘陵部で確認された濠や住居などの遺構が東側斜面にどのように並ぶかを追求した。また原ノ久保A地区では墓域を調査した。原地区では、弥生中期から古墳前期の堅穴住跡9棟、溝4条、濠2条、小児塚棺墓6基が検出され、内濠内部の丘陵部東側斜面に居住域が並ぶことと、濠が東に伸することが確認された。原ノ久保A地区では箱式石棺墓13基、集石遺構4基、石蓋土壙墓・土壙墓6基、土墳9基、小児塚棺墓3基、集石遺構4基、溝2条が検出され、副葬品として9号土壙から長安子孫銘の内行花文鏡1面、筒形不明銅鏡1点の他ガラス製丸玉、ガラス製勾玉、碧玉石製管玉が出土した。また、8号箱式石棺墓からは、小形彷彿鏡が出土し、この墓域が弥生終末期における有力者階層のものであることを裏付けることとなった。

平成9年度は芦辺町原・高元地区と石田町池田大原・原ノ久保B地区を対象とした。原地区では、前年度調査区の南側と丘陵西側斜面の調査を実施した。その結果、弥生中期から古墳前期の堅穴住跡17棟、濠1条、溝6条、小児塚棺墓5基などの遺構が検出され、住居跡が多数重複しており、東側斜面が長期間にわたって居住域として利用されていることが判明した。また小児塚棺墓は濠の両岸に並んだ状況で検出され、本来の墓地のあり方とは性格が異なると推測される。池田大原は丘陵つけ根の西側にあたり、調査が空白の地域であった。この区域からは、東西方向にのびる弥生中期の溝1条が検出されたが、性格については丘陵部を区切る環濠外の防衛ラインの一つとも推測されている。

平成10年度の調査は、芦辺町原・高原地区と石田町大川・原ノ久保地区である。原・高原地区では、



第3図 原の辻遺跡概要図 (1:8,000)

丘陵部西側中央部に若干地形がくびれた部分があり、ここにも区画性をもつ濠が確認できるのではないかという目的で調査区を設定した。その結果、丘陵北東側の低地に近い水田からは後期を主体とする層から多量の土器、石器とともに島系の土器も出土した。また道路状になるのではないかと思われる遺構も検出されている。さらに一段高い部分からは住居跡や多量の土器とともに、一部貝塚が形成された状況も確認された。大川地区は平成6年度に農道拡幅工事に先立って行われた調査で、初期貿易陶磁などの古代の遺物が出土しており、さらに範囲の拡がりや、新たな遺構の検出を目的として行った。その結果、古代遺物はこれまでより東西の方向に拡がることが明らかになった。さらに注目を引いたのが、イスラム陶器の出土であった。小破片が1点とは言え、その出土意義は大きなものがある。原ノ久保地区の調査は、平成8年度調査の墓域がさらに南側まで拡がるのかということであったが、すでに削平された部分も多く、遺構を確認するには至らなかったが、壺棺や石棺の破片は若干残されており、墓域が拡がっていたことを把握できた。

平成11年度の調査は、芦辺町不條地区、石田町柏田・芭ノ木地区の調査を行った。不條地区は丘陵北西部の低地である。調査の結果、弥生時代の旧河道と濠を2条確認した。濠は弥生中期に掘られて一旦埋没したあと、弥生後期に掘られて終末から古墳前期に再び埋没したので、内濠と外濠にあたるものである。この他の遺構は弥生後期から中期と考えられる柱穴が検出されている。柏田地区は古代の遺物が出土した大川地区に隣接している。昭和51年度に壺棺墓1基が出土した第20試掘場のまわりに設定したが、関連の遺物の出土はなかった。しかし、旧石器の土層が一部確認された。小児壺棺墓が検出された安川建設北側にも設定したが、関連の遺構は検出できなかった。芭ノ木地区では弥生時代の明確な包含層は確認できなかったが、南西部試掘場からは旧石器時代の良好な包含層が検出され、ナイフ形石器や台形様石器が出土した。

(2) 平成12年度の調査

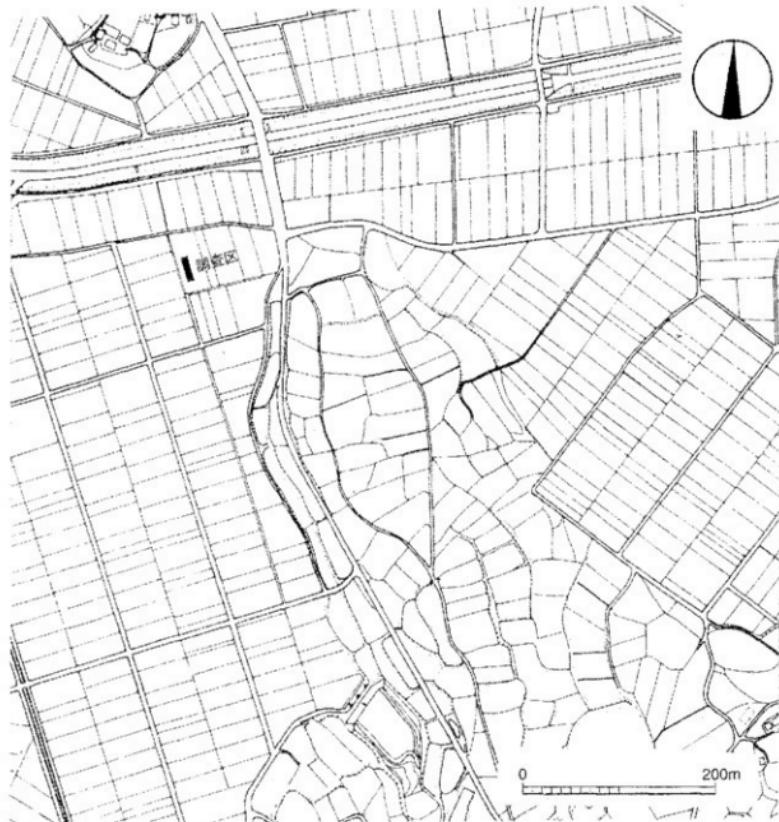
今年度の調査は、芦辺町不條地区と石田町大川・原ノ久保地区を対象とした。不條地区は丘陵部西側低地の平成10年度耕起き場付近水路等状況調査B区西側に接して調査区を設定した。その結果、遺構は弥生前期末から中期初頭にかけての溝2条と、弥生中期前半の土塙6基、中期後半の土塙11基などと、遺物は弥生中期を中心とした土器・石器が出土したが、弥生前期末の上器も出土している。大川地区の調査では、丘陵部つけ根のやや東寄りの試掘場から、濠が確認された。これまで確認されている濠には方向からして繋らないもので、新しい遺構の発見である。原ノ久保地区では、原ノ久保A地区の墓域がどこまで拡がるのかを目的として調査区を設定した。その結果、平成8年度調査の墓域の範囲が絞られてきた反面、弥生中期の新たな墓域が確認され、石棺墓1基と小児壺棺2基が検出されている。

III 調査

1. 不條地区の調査

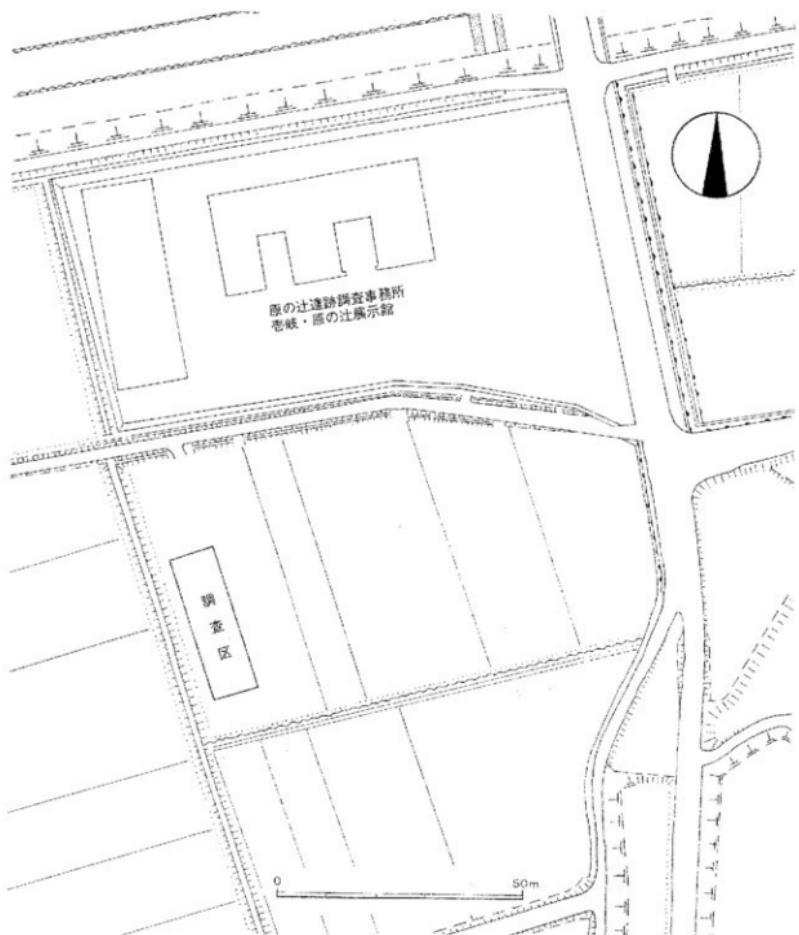
(1) 調査概要（第4図、第5図）

平成10年度の船着き場付近水路等状況調査（以下平成10年度特定調査と記す）・平成11年度の環濠等状況調査（以下平成11年度特定調査と記す）では、弥生時代後期に環濠の外側に掘られた複数の濠や、区画や用排水目的でつくられた溝が検出されるなど、旧河道に挟まれた台地北西低地部の状況がしだいに明らかになっていった。また北西低地部からは掘立柱建物跡とみられる柱穴が多数確認され、



第4図 調査区位置図 (1/5000)

低地部における生活域も判明してきた。今年度の調査では、過去2年間の調査で検出された塗や溝などのようにつながり、またどのような広がりを見せていくのか。前期末から中期の居住域とされるこの一帯が時代とともにどのように変化していたのかをさらに詳しく調査するため、平成12年5月8日～平成12年5月17日に範囲確認調査を実施した。調査区は30m×10mを設定し、300m²を調査した。また、調査区南側につながるかたちで本年度塗等状況調査A区(50m²)を設定して調査した。



第5図 調査区配置図 (1/1000)

(2) 基本土層と遺物

遺構上面は度重なる水田化により擾乱を受けている。

また、2層・3層を割り込む形で暗渠排水がつくられていた。この暗渠排水は調査区全域に縦横に検出され、深いところでは弥生の遺構面に達し、遺構も多く暗渠によって切られていた。

1層及び出土遺物（第6図、第10図）

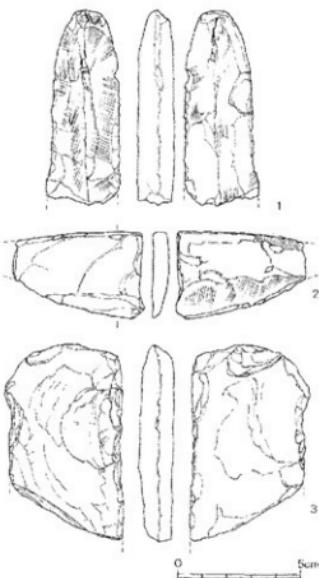
基本土層は、1層が褐色の現在の水出面である。

1は石剣である。中央に腰を持ち、正裏面ともに磨きをかけ、下部は欠損する。断面は菱形を呈している。2は石臼の欠損品である。刃部の研ぎだしが裏面に残る。3は正面の左側縁に抉り調整を行い、右側縁は細かい剥離削離を加えた挿入石斧の製作工程段階と考えられる。

2層及び出土遺物（第7図、第8図、第9図、第10図）

2層は灰黄色の上層で、中世の白磁IV類も混入しているが明治の陶磁器が出土しているので、近世から近代の水出耕作面であろう。

1は石盤製作4段階工程の資料である。正裏面に一部研ぎがあり、断面長方形をなし石材に粘板岩を用いている。2は石盤製作2段階工程の資料である。研ぎに入る前の石盤の素材で断面長方形を呈し、石材に粘板岩を用いている。3は石盤製作2段階工程の資料で研ぎを行っていない。断面は厚みのある三角形を呈し石材は粘板岩を素材としている。4は石盤製作3段階工程の資料で断面長方形の正面、裏面、両側面、上面、下面の6面にカットを行い石材に粘板岩を用いている。5は石盤製作4段階工程の資料である。断面はカマボコ状を呈し、裏面と右側面に研ぎ痕が残り石材は粘板岩を素材とする。6は石盤製作工程4段階の資料である。裏面を研ぎだし、その他は敲打による調整を行い断面はカマボコ状を呈する。7は石盤製作工程4段階の資料である。正面、右側面、裏面の一部に研ぎだしを行い断面は厚みのある三角形を呈し、石材は粘板岩を用いる。8は石盤製作4段階工程の資料で正面、左側面、裏面の一部に研ぎを行い断面は長方形をなし石材に粘板岩を用いている。9は石盤製作工程3段階の資料である。正面は、敲打痕が残り断面はカマボコ状を呈する。石材は粘板岩を素材とする。10は石盤の完成品であるが刃部を欠損する。断面は長方形をなし、石材に粘板岩を使用する。11は石盤の完成品である。上面のみに凹凸を残し、その他は平坦に仕上げている。石材は粘板岩を用いている。12は石盤の完成品で上面に凹凸を残し石材は粘板岩をしている。13は石盤製作途中の資料で刃部となる部分は下端から調整削離を行い、背の部分にも加筆を加えている。14は石剣であるが風化のた



第6図 1層出土遺物 (1/2)



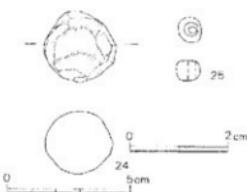
第7図 2層出土遺物 (1~14は1/2・15~17は1/3)

め一部に研ぎだしを認められるのみである。石材は硬質砂岩を用いている。15は敲打による整形段階の船刀石斧である。16は敲打後に4面に研ぎを行う石斧で刃部は欠損している。17は砥石として使用したものであるが風化のため使用痕不明となっている。18は黒曜石製の石鏃である。断面は凸レンズ状をなし、正面とともに丁寧な押圧剥離を繰り返して作出している。製作技術の状況から縄文時代の所産と考えられる。19は黒曜石製の局部磨製石鏃である。断面は凸レンズ状をなし、正面のみに研ぎを行い周縁は押圧剥離により作出し左側の脚を欠損している。20は黒曜石製の石鏃で、断面やや扁平な凸レンズ状をなしている。加工整形が稚拙で剥片跡の範囲に含まれる要素を持つ。21はサスカイト製で有茎石鏃である。肉厚で断面は凸レンズ状をなしている。22は黒曜石製のスクレイバーで、石匙の形状が想定されるが、右側面を欠損する。23は黒曜石製のスクレイバーである。左側面に細かいリタッチ調整を施し、裏面は自然面を残している。24は砂岩を丸く加工した玉石である。25は濃いブルーの色をしたガラス小玉。

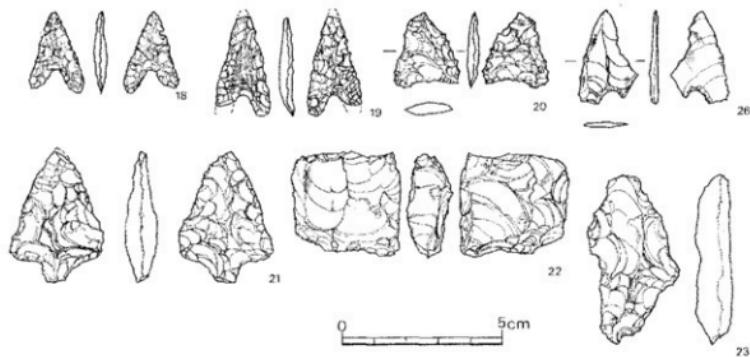
3層及び出土遺物（第9図、第10図、第11図）

3層は暗灰黄色の土層で古代から中世の水田面である。調査区北西側から南東側に向かってゆるやかな傾斜がみられ、調査区北側では3層は削平され、2層直下が茶褐色粘質土（地山）となっていた。調査区南側では3層の下に土師器が出土する淡灰黄色の古墳時代の3b層が検出された。

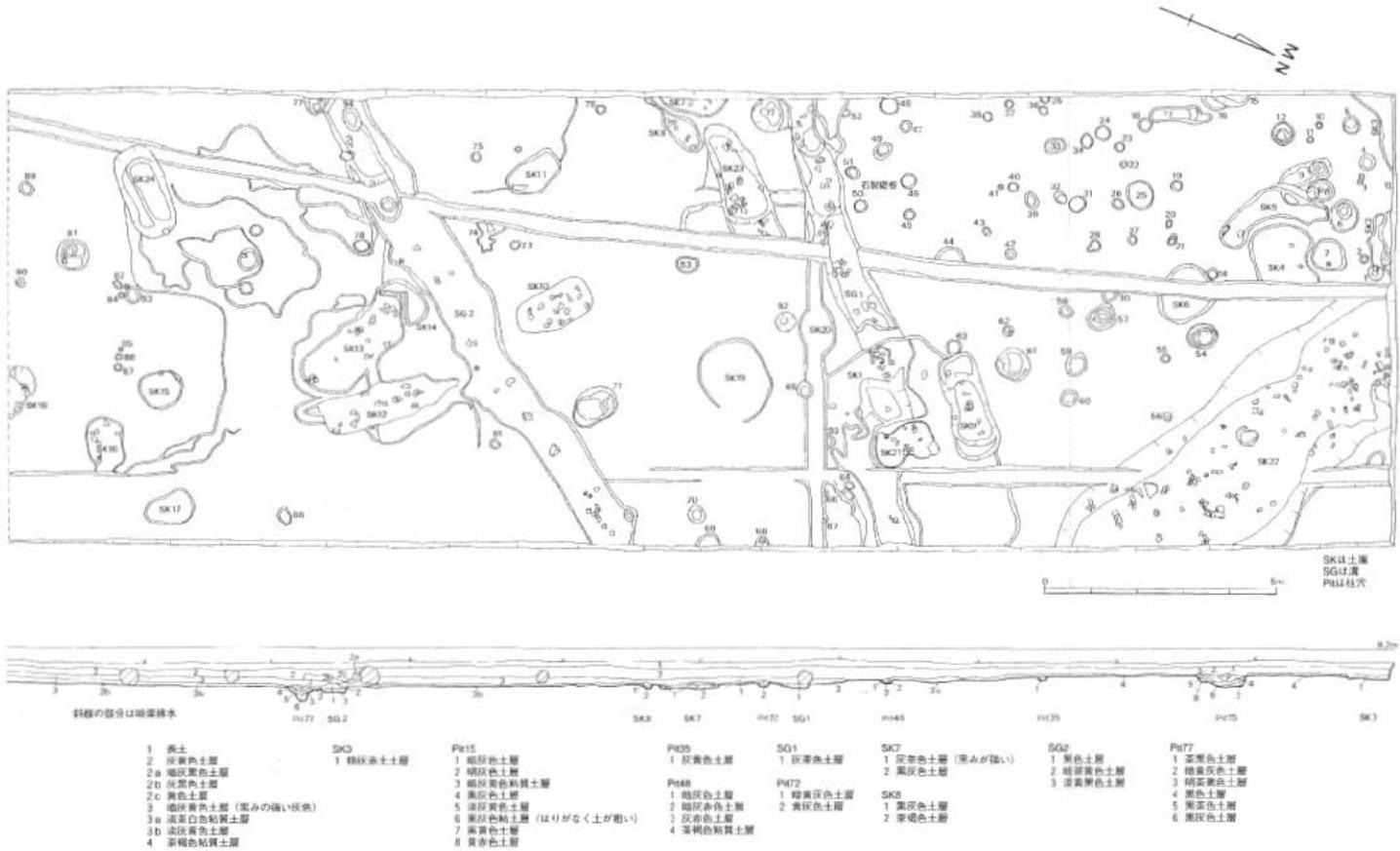
26は黒曜石製の剥片鏃である。抉り部分は正面裏面とともに細かいリタッチ調整を行っている。27は石鏃製作行程4段階資料で断面は長方形をなす。正面の刃部に一部研ぎだしを行っている。28は右鏃製作行程4段階資料で断面は長方形をなしている。正面の刃部と裏面に研ぎだしを行っている。29は硬



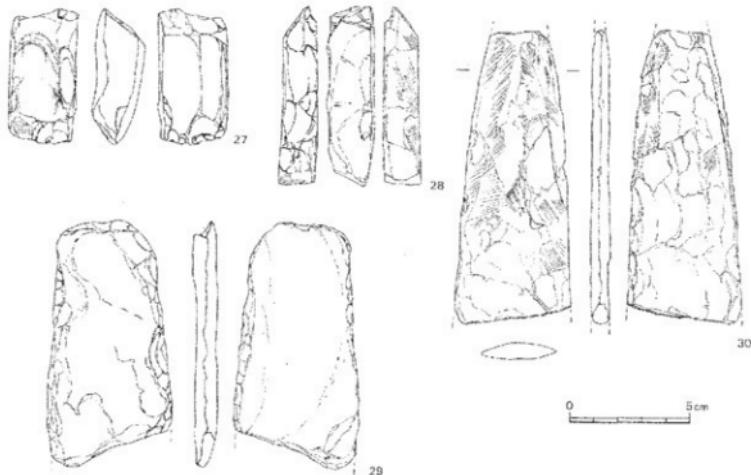
第8図 2層出土遺物(24は1/2・25は1/1)



第9図 2層・3層出土遺物(2/3)



第10图 土质及U造桥配图 (1/80)



第11図 3層出土遺物（1/2）

質砂岩の両側から調整加工を施しているが上下部を欠損する。石剣か石錐の未製品と見られる。30は硬質砂岩の両端縁から研ぎだしを行い中央に段を持った石剣である。上下部分を欠損する。

(3) 遺構・遺物（第10図）

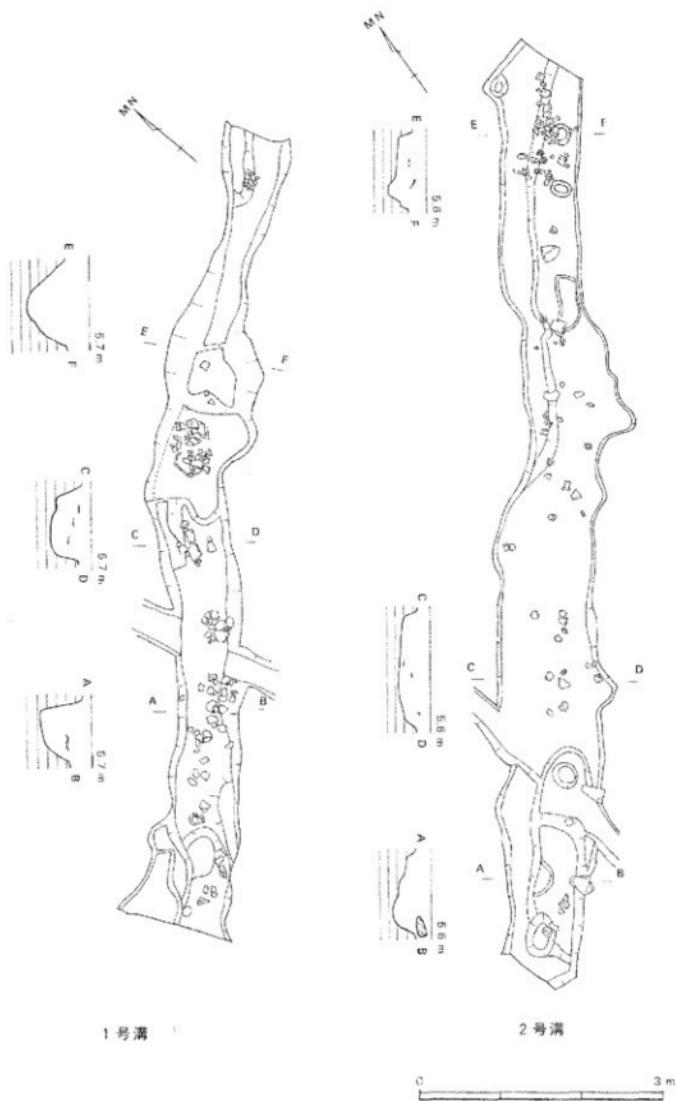
今回の調査区から溝2条、土壌24個、柱穴94個を検出した。

①溝（第12図）

溝は、2条検出した。溝は2条とも南西から北東方向に延びていた。

1号溝は最大幅約1m、深さは最も深いところで約50cm、最も浅いところで約20cmを測り、長さを約10mを確認した。覆土は1層が灰赤色土、2層が淡灰赤色上で、弥生前期末から中期前半の土器を主体に弥生土器約450点、石器約30点が出土した。平成10年度特定調査B区5号溝・平成10年度幡ヶ川流域総合整備計画に伴う緊急発掘調査（以下平成12年度農道調査と記す）1号溝につながるものである。

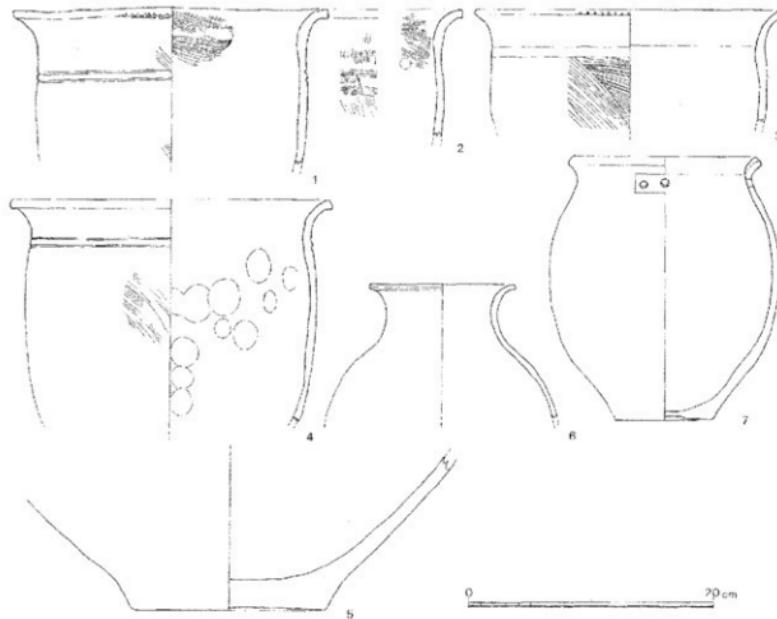
2号溝は最大幅約1m20cm、最も深いところで約30cm、最も浅いところで約20cmを測り、長さ約11m30cmを確認した。弥生前期末から中期前半の土器を主体に弥生土器約630点、石器約50点が出土した。平成10年度特定調査B区6号溝・本年度環濠等状況調査（以下平成12年度特定調査と記す）B区2号溝・平成10年度農道調査2号溝につながるものである。2条の溝はともに区画のため又は生活・農業用の用排水路と考えられる。



第12図 1号溝・2号溝実測図 (1/60)

1号溝 出土遺物 (第13図、第14図)

1は如意形口縁をなす変形土器である。胴上部に2本の沈線をめぐらし、口縁端部に3mm間隔で刻目を付けている。外面の刷毛目は、唇面のナデ消で一部残る程度である。内面は、頸部から口縁部に斜行する刷毛目の整形を全周に施す。色調は外面が黄茶色で内面は暗茶褐色を呈している。胎土に石英粒、金雲母が入る。2は如意形口縁の変形土器で、外面の直下をハラ状工具で平坦にナデ整形し、頸部は縦位の刷毛目と肩部に浅い沈線を一本引き、以下を横位と斜位の刷毛目で整形した痕が残る。内面は頸部から口縁部に刷毛目を斜位と横位に付けている。胎土に3~4mmの長石粒が目立つ。器面の色調は外面が灰白色で内面は淡褐色を呈している。3は如意形口縁の口唇部に沈線1本をめぐらし、端部に幅約3mmの刻目を入れて口縁部を一周している。また、頸部と肩部の境には浅い沈線を1本めぐらしている。器面の整形は、縦位の刷毛日のあとに斜位の刷毛目で整形している。内面は風化のために一部に口縁部辺の刷毛目を観察できる程度である。4は如意形口縁の変形土器である。外面端部に幅3mmの刻目を浅く入れ胴上部に沈線を2本めぐらし、以下は斜位の刷毛目で成形し、内面の胸部に指押さえの痕を残す。また頸部から口縁部の一部に斜位の刷毛目を観察できる。器面の色調は外面



第13図 1号溝出土遺物 (1/4)

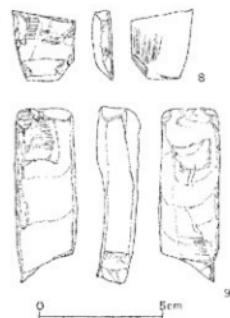
がくすんだ黄褐色で、内面は淡赤褐色を呈している。5は人形の壺の底部で平坦な底部をなし、中央部がやや凹む。接地面の径が15.3cmを測る。色調は外面が淡い桃色をなし、内面は灰黄褐色を呈している。胎土は軽く3mm程の長石が目立つ。6は壺形土器で頸部がなめらかに外反して口縁部へ移行し、口縁端部は丸みを持って統める。器面全体が風化し整形痕は不明である。器面の色調は外面が赤褐色で内面は暗灰茶褐色である。胎土に長石、金雲母、黒雲母が混入し粗い器面を露出している。7は壺形土器で、底部中央が凹み、立ち上がりは底部から内湾して胴部中位に最大径(19cm)があり、頸部で外反する。口縁部の内面に粘土帯を2cm幅で貼付けてめぐらしている。

補修孔を頸部の2ヶ所に内面から外面に向かって開けている。また、補修孔は対称して同様に2ヶ所に設けている。器面の色調は、外面が淡赤褐色をなし、内面は暗黄褐色を呈している。外面は全体に風化するが、一部にみがき整形の痕跡が残った擬無文土器である。8は粘板岩を素材として作られた石盤で、片刃の刃部としている。加工時の剥離痕を研ぎによって滑らかにし、両側面と裏面を平坦に研ぎあげて基部は欠失している。9は製作途中の石盤である。正裏面と右側面に研ぎ痕があるが、形成過程で刃部以下を欠損したため廢棄したものと思われる。石材は8と同様に粘板岩を使用。

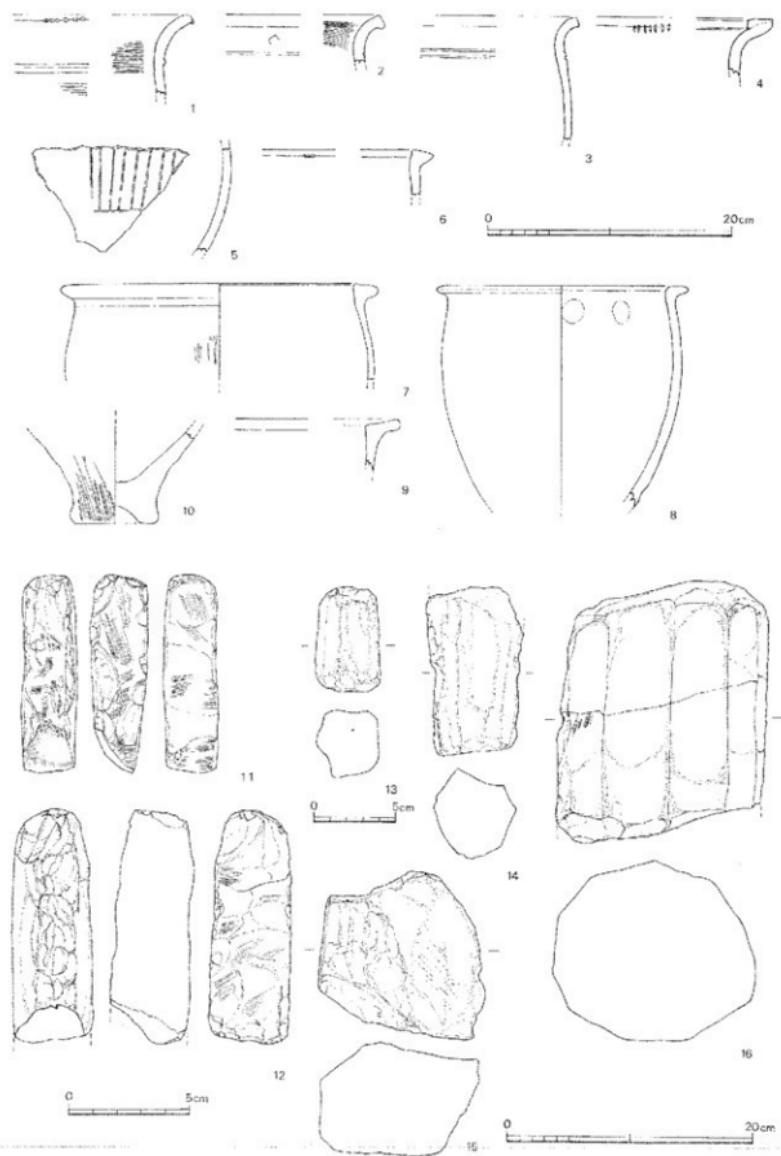
2号溝 出土遺物 (第15図、第16図)

1は口縁部の外反が大きい壺形土器である。器形は如意形口縁をなし、頸部に明瞭な刻目を付し、頸部に一条の突帶をめぐらしている。

器面の整形は、刷毛目を突帶以下に行って内面は頸部から口縁部にかけて約4cm幅の刷毛目整形を残し、色調は外面が黄褐色で内面が明黄色を呈している。2は如意形口縁をなす壺形土器で、口縁端部に刻目はなくナデ整形で終えている。外面頸部に深めの沈線が1本入り内面は頸部に斜位の刷毛目と口縁部付近を横位の刷毛目で整形している。器面の色調は外面が暗茶色で内面は淡灰茶色を呈している。3は如意形口縁の壺形土器である。頸部に2本の沈線がめぐり、口唇部はナデ整形とし、刻目は付けていない。器面の色調は外面が淡黄白色となり、内面は淡赤褐色を呈している。内面にわずかに刷毛目が付き、外面は風化が進み明瞭でない。4は口縁部を平坦に作る壺形土器である。器面の口唇部下に長さ約9mm、幅3mmの刻目を付している。内面は、口縁端部の厚みを幅7mmとして直に面取りし、頸部に付けている。器面の色調は、内外面ともに黒色を呈する。5は壺形土器の胴部片で縦位に8本と横位に1本の沈線を引いている。器面の色調は、外面が淡黄色で内面が淡黄赤色を呈している。6は断面三角形の口縁部をなす壺形土器である。口縁端部に幅2mmの浅い刻目を付し、口縁部は平坦としている。器面の色調は内外面ともに淡黄白色を呈している。7は口縁部を平坦にした壺形土器である。口縁端部を4mm幅のナデ整形としている。外面の刷毛目は、縦位に行い内面はナデ整形としている。器面の色調は、内外面ともに暗茶褐色を呈する。8は壺形土器で口縁部は丸みを持った平坦な口縁としている。口縁直下は、指整形をそのまま残し器面は、漬しを行うのみで、刷毛目整形を行っ

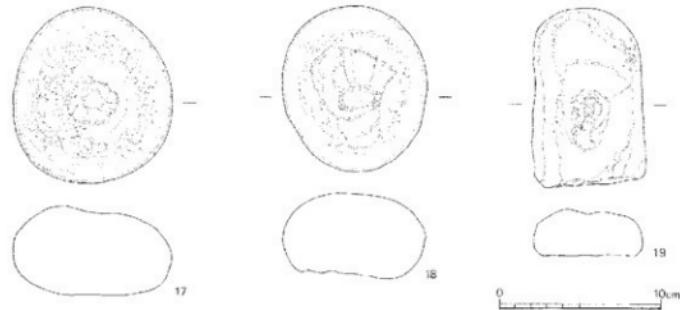


第14図 1号溝出土遺物 (1/2)



第15図 2号溝出土遺物 (11, 12は1/2・13, 14, 15は1/3・それ以外は1/4)

ていない。器面の色調は内外面ともに赤黄色を呈する。口縁部の外径は23cmを測る。9は変形土器で、頸部から直線的に伸びて口縁部へ移行し、口縁は上向きとして、端部に丸みを持たせている。色調は、内外面とともに淡赤白色を呈している。10は変形土器の底部である。底部は上底とし、内径で4.5cm、外径で7.3cmを測る。器面に刷毛目の整形痕が残る。色調は、外面が淡橙白色で内面は灰色を呈する。11は、石鑿で小形柱状片刃石斧の完形品。刃部と両側面、基部端、裏面とともに研ぎ上げ、正面の基部については高低差をなくすため、敲打の部分を一部研ぎかけている。断面はカマボコ状をなし、石材は粘板岩を使用する。12は、硬質砂岩を素材として制作した抉入片刃石斧の基部の部分で、正面は敲打痕を残す。両側面と裏面は研ぎだしを行っている。13は砂岩製の砥石の上下を叩き石に転用している。研ぎ出しの凹面を2ヶ所有する。14は砥石の研ぎだし面を6ヶ所有する。15は砥石の研ぎだし面が3ヶ所残る。16は砥石の研ぎだし面を11ヶ所確認し、1ヶ所は表面が破損しているため数えていない。17は円石で、正面の凹み部分の径は2.5cm程度と浅く凹んでいる。裏面は平坦で中央に敲打痕がわずかに残る。18は正面に使用による凹凸の痕跡を残し、裏面は1/3程度を欠損する。19は硬質の砂岩の中央部に凹を持つ。本来は別な用途が考えられ右側面に浅い抉りが付く。



第16図 2号溝出土遺物 (1/3)

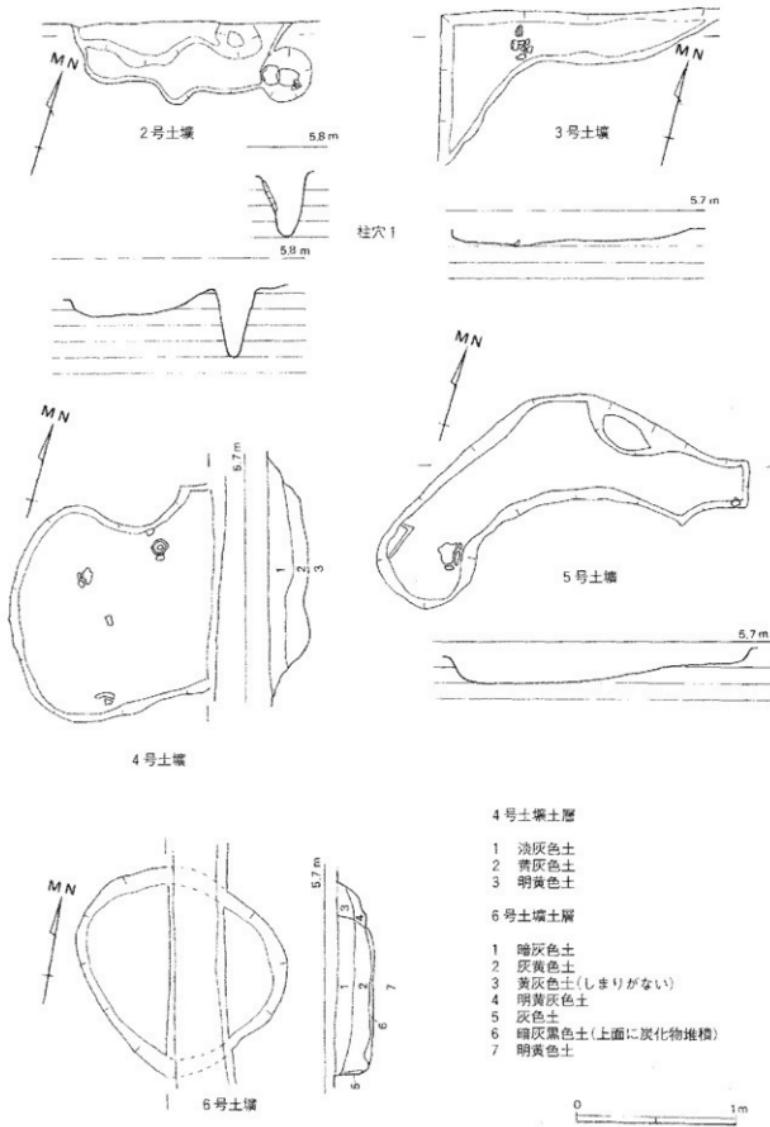
参考文献

- 『原始古代の長崎県通史編』長崎県教育委員会1998
- 『原始古代の長崎県資料編Ⅰ』長崎県教育委員会1996
- 『車出遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第8集
長崎県教育委員会・郷ノ浦町教育委員会1998

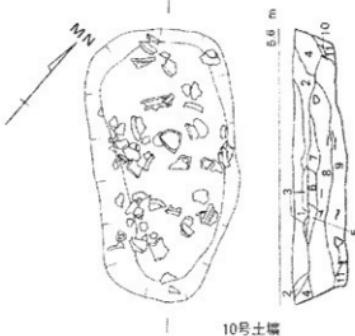
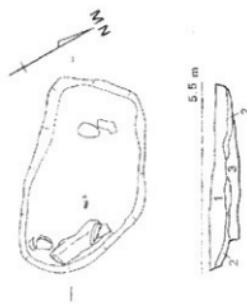
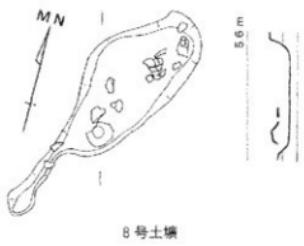
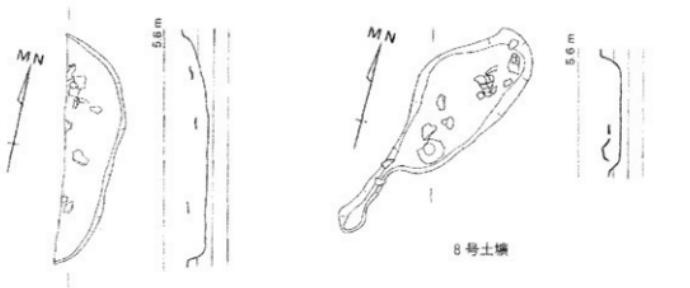
②土壙及び柱穴（第17図～第22図）

今回の調査地区においては、上塙を24、柱穴を94検出した。ここでは、実測図を掲載したものを中心とし、その他特徴的なものについて報告する。

1号土壙は長径約4m60cm、短径約3m50cmで覆土は暗灰色土である。土器約380点、石器42点が出土した。1号溝・9号土壙が埋没したあとに掘られ、この土壙が埋もったあと21号土壙が掘られている。平成10年度特定調査B区西塙南でこの土壙につながる部分を検出している。2号土壙は調査区北塙際で西側部分を検出した。長径1m40cm、深さ約20cm。覆土は灰黒色土で、土器12点、石器1点が出土した。この土壙内から幅約30cm、深さ約40cmの柱穴も検出された。3号土壙は調査区北西際で検出した。確認されている範囲で最大径1m70cm、深さ6cmを測る。覆土は淡灰赤色粘質土で、土器19点が出土した。4号土壙は長径約1m30cm、短径1m20cm、深さ約20cmを測る。覆土は黒灰色土で、土器81点、石器7点が出土した。土壙東側を暗渠によって切られている。また西側は5号土壙を切っている。5号土壙は4号土壙に切られているため詳細は不明。確認できる範囲で長径約2m30cm、深さ約20cmを測る。覆土は淡灰色土で、土器39点、石器2点が出土した。6号土壙は長径約1m40cm、短径約1m20cm、深さ約30cmを測る。覆土は黒灰色土で、土器46点が出土した。土壙中央を暗渠が切っている。7号土壙は調査区西塙際で東側部分を検出した。確認できる範囲で長径は約1m50cm、深さ約15cmを測る。覆土は黄灰色土で、土器51点が出土した。8号土壙は7号土壙と23号土壙に切られているため詳細は不明。確認できる範囲で最大径1m60cm、深さ8cmを測る。覆土は濃黒灰色土で、土器16点が出土した。9号土壙は長径約2m30cm、短径約80cm、深さ約50cmを測る。覆土は黒灰色土で、土器214点、石器36点が出土した。10号土壙は長径約1m70cm、短径約90cm、深さ約35cmを測る。覆土は黒明灰色土で、土器約480点、石器3点が出土した。11号土壙は長径約1m30cm、短径約70cm、深さ約20cmを測る。覆土は黒明灰色土で、土器31点、石器2点が出土した。12号土壙は長径約3m、短径約90cm、深さ約30cmを測る。覆土は青灰色土で、土器437点、石器6点が出土した。13号土壙は長径約2m80cm、短径約1m20cm、深さ約17cmを測る。覆土は濃黒灰色土で、土器426点、石器4点が出土した。14号土壙は13号土壙に切られているため詳細は不明。確認できる範囲で最大径約1m10cm、深さ約20cmを測る。覆土は青灰黑色土で、土器2点が出土した。15号土壙は長径約1m、短径約80cm、深さ約10cmを測る。覆土は炭化物混灰色土で、土器27点、石器3点が出土した。16号土壙は長径約1m20cm、短径約80cm、深さ約7cmを測る。覆土は濃黒色土で、土器287点、石器11点が出土した。17号土壙は長径約1m、短径約70cmで深さ約4cmを測る。覆土は赤灰色土で、土器3点が出土した。18号土壙は調査区南際で北側半分を検出し本年度特定調査A区で南半分を検出した。最大径約1m、深さ約20cmを測る。覆土は灰色土で、土器154点、石器1点が出土した。20号土壙は幅約80cm、覆土は灰赤色土である。中央を暗渠によって大部分が切られているため詳細は不明である。21号土壙は長径約1m30cm、短径約70cm、深さ約8cmを測る。覆土は灰色粘質土で、土器23点、石器1点が出土した。22号土壙は長径約7m、短径約3m、深さ約30cmを測り、本調査区では完結していないものの、東側に隣接する平成10年度特定調査B区において検出された土壙につながるものである。覆土は



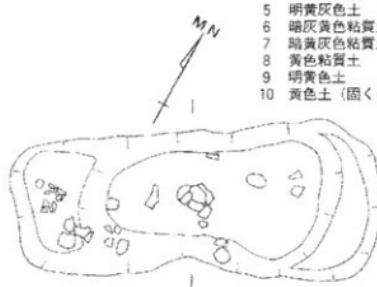
第17図 2号・3号・4号・5号・6号土壤実測図・土層図 (1/30)



11号土壤

9号土壤土層

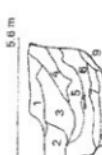
- 1 灰白色土
- 2 暗灰白色土
- 3 淡黄灰色土
- 4 黑灰色土（炭化物含む）
- 5 明黄灰色土
- 6 暗黄灰色粘質土（炭化物含む）
- 7 暗黄灰色粘質土（やや黄色味強い）
- 8 黄色粘質土
- 9 喷黄色土
- 10 黄色土（固くはる）



9号土壤

10号土壤土層

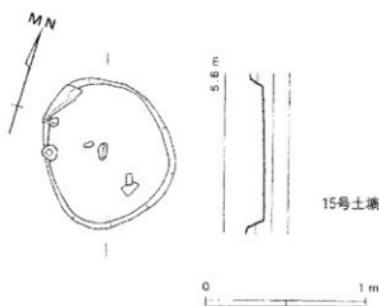
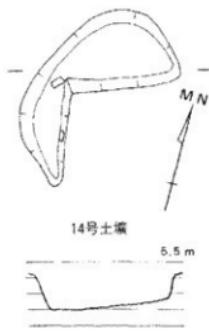
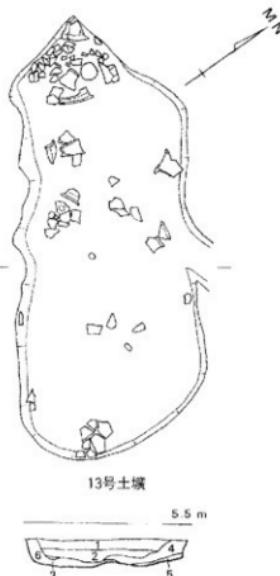
- 1 淡黄色土
- 2 灰黄色土
- 3 明灰黄色土
- 4 黄灰色土
- 5 黄褐色土
- 6 オリーブ褐色土
- 7 明黄褐色土
- 8 暗灰色粘質土 炭化物混
- 9 暗褐灰色粘質土 炭化物混
- 10 明褐褐色土
- 11 純い黄色土



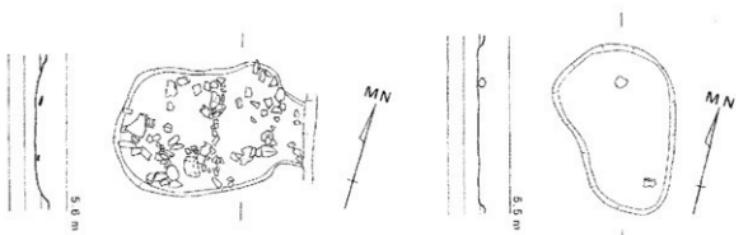
11号土壤土層



第18図 7号・8号・9号・10号・11号土壤実測図。土層図 (1/30)

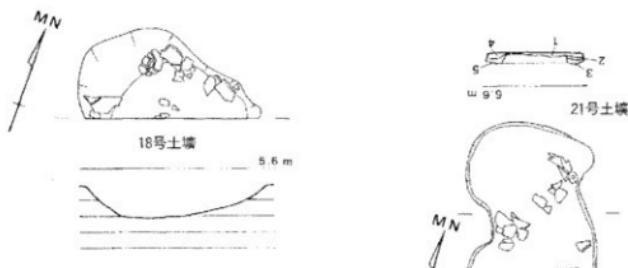


第19図 12号・13号・14号・15号土壤実測図・土層図 (1 / 30)



16号土壤

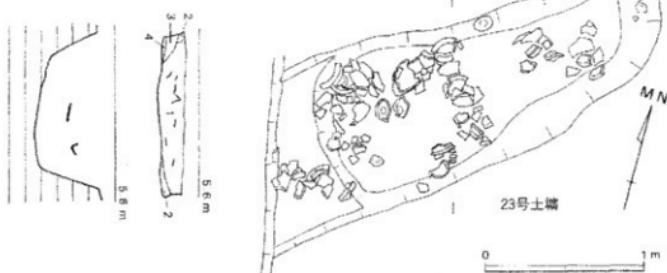
17号土壤



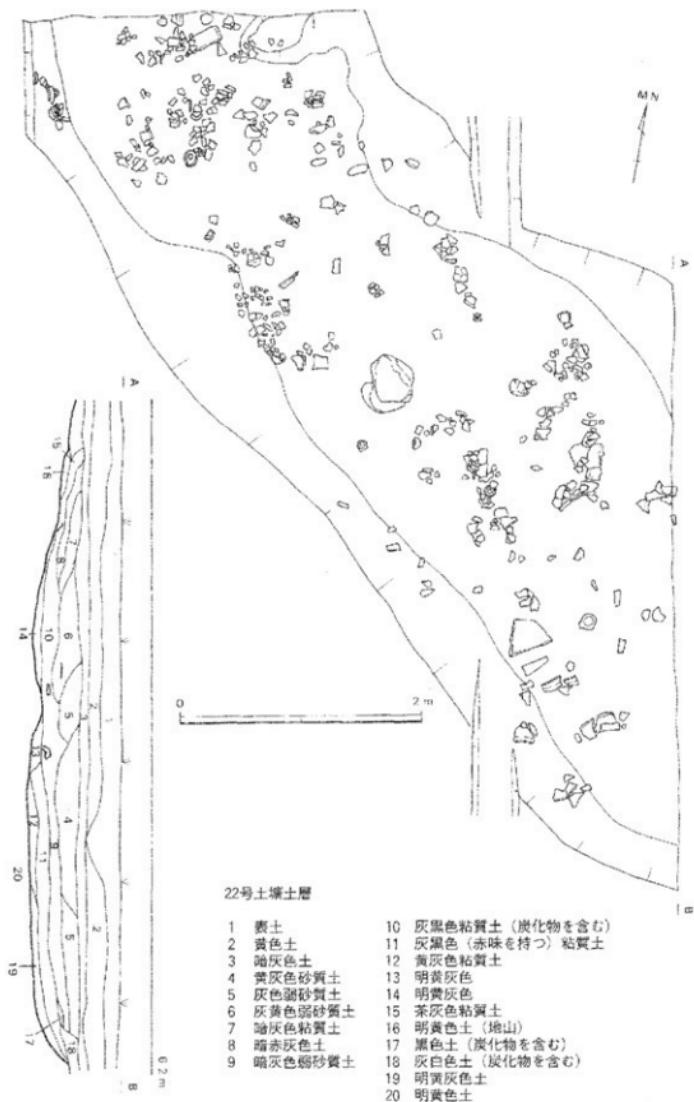
21号土壤土层

23号土壤土层

- | | |
|-------------|---------|
| 1 赤色土(燥土) | 1 疏灰黑色土 |
| 2 黑色土(炭化物含) | 2 黄灰色土 |
| 3 灰黑色土 | 3 暗黄灰色土 |
| 4 明黄色土 | 4 明黄色土 |
| 5 灰黑色土 | |



第20図 16号・17号・18号・21号・23号土壤実測図 (1/30)



第21図 22号土壤実測図・土層図（1/40）

24号土壤土層

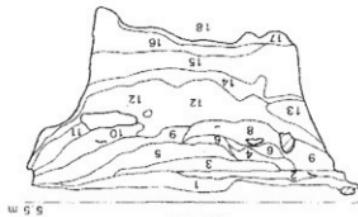
- 1 黒灰色土
- 2 暗灰黄色土
- 3 黄灰色土
- 4 塔黄色土（炭化物有り）
- 5 灰黄色土
- 6 明黄色土
- 7 灰黄色土
- 8 青灰色土
- 9 蓝黄灰色土
- 10 明黄色土
- 11 明黄灰色土（やや灰色が強い）
- 12 蓝灰色砂質土
- 13 黄色粘土（灰色の砂質土がクラックに入り込む）
- 14 灰白色砂質土（やわらかい）
- 15 黑色砂質土
- 16 灰色砂質土
- 17 茶灰色砂質土
- 18 黄色砂質土（地山）

柱穴61土層

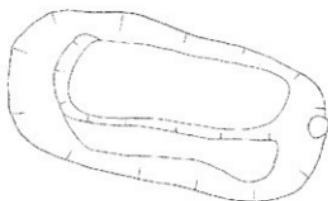
- 1 灰赤色土
- 2 暗黄色土（しまりがない）
- 3 黄色土（しまりあり）
- 4 暗灰茶褐色土

柱穴71土層

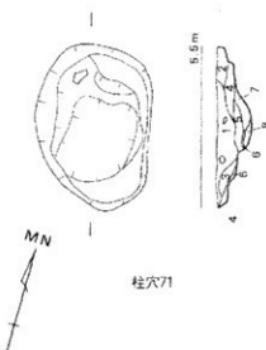
- 1 黒灰色土（まだらに黄斑あり）
- 2 暗黑灰色土
- 3 黄黑色土
- 4 灰黄色土
- 5 黄色土
- 6 黑灰色土
- 7 暗灰黑色土
- 8 黄色土



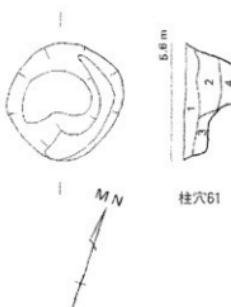
24号土壤



MN



柱穴71



柱穴61

0 1 m

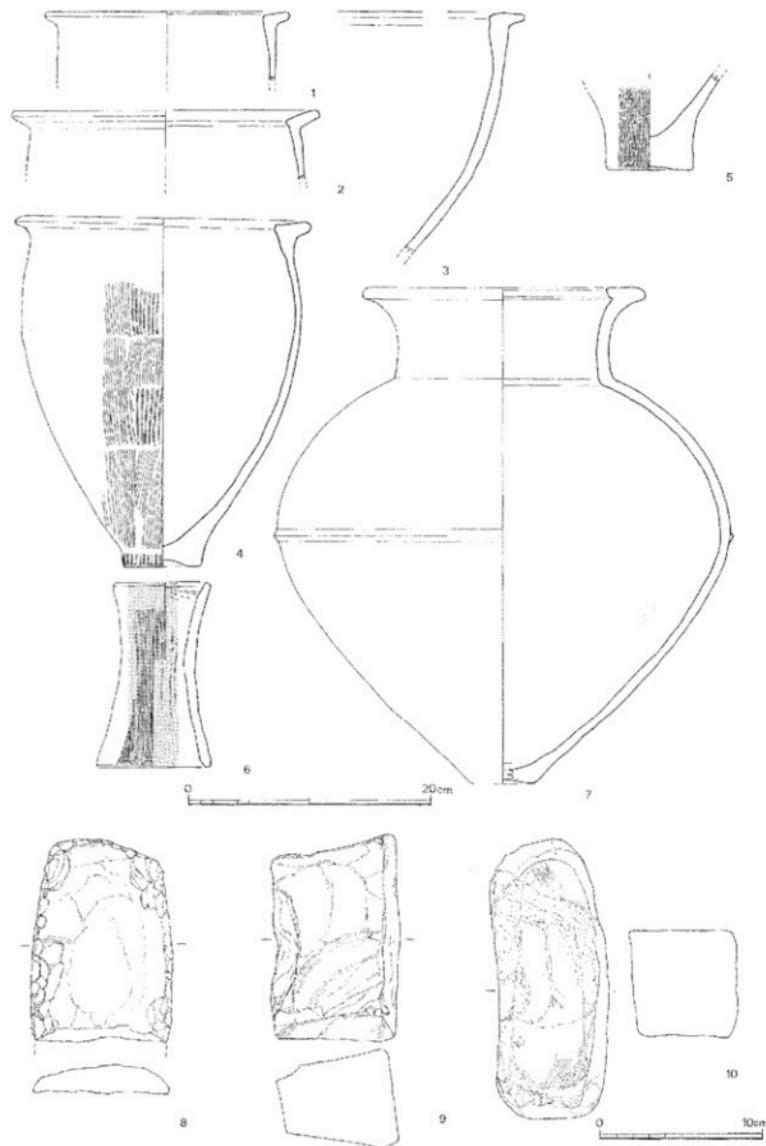
第22図 24号土壤・柱穴61・柱穴71実測図・土層図 (1/30)

1層が茶褐色粘質土、2層が暗灰黄色砂質土で、土器約1360点が出土した。また石製品や石製品の素材・未製品、チップ等が90点出土した。今回調査区内の1号・9号土塹の平成10年度特定調査B区の2号・6号土塹（調査区北より）からも同様ものが多数出土している。また、2層・3層包含の遺物を見ても、調査区北側から出土した石製品の素材・未製品の数が多い。このことから台地北西低地部のこの地域に石製品工房が存在した可能性がさらに高まった。23号土塹は東端を暗渠で切られている。長径約2m60cm、短径約1mで深さ約40cmを測る。覆土は濃黒灰色土で、土器約800点、石器約20点が出土した。24号土塹は長径約2m、短径約1m、深さ約40cmを測る。土器約150点、石器7点が出土した。柱穴61は径約80cmではば円形をしている。深さは約30cmを測る。覆土は灰赤色土で、土器3点が出土した。柱穴71は長径約1m、短径約70cm、深さ約20cmを測る。覆土は黒明灰赤土で炭化物を多く含み、上器30点が出土した。柱穴81は径約65cmで円形である。深さは約20cm、覆土は灰色土で、上器9点、石器2点が出土した。柱穴90は円形で、径約20cm、深さ約18cmを測る。覆土は淡灰色土で、石器3点が出土した。

柱穴51は、長径約30cm、短径約25cm、深さ約40cmで石製禮盤が出土した。石製禮盤は本調査区東側に隣接する平成10年度特定調査B区から3基、西側部分を調査した平成10年度轟鉢川流域総合整備計画に伴う緊急発掘調査で6基、平成11年度環濠跡状況調査で1基確認されている。現在まで11箇所が確認され、原の辻遺跡の低地部における建築物の構造を解明するうえで重要な遺構である。

1号土塹 出土遺物（第23図、第24図）

1は口縁部を平坦なし、やや上向きの口縁部とした菱形土器である。器面の調整は風化して明瞭でなく色調は外面が肌色で内面は赤色を呈している。2は口縁を平坦とし1より長めとなる菱形土器である。内面の口縁端部がやや伸び、器面の色調は、内外面ともに茶褐色を呈する。3は口縁を平坦となした菱形土器である。内面の張部と口縁部の境に浅い凹みが一巡し、器面は内外面ともに器壁が風化し整形痕が不明瞭。4は完形の菱形土器である。器面に縱位の刷毛目を底部から胴上部まで施し、器形は底部は上底となし、胴部上位に張りを持ち短く平坦な口縁部が付く。色調は外面が茶赤色で内面が黒灰色を呈している。5は菱形土器の底部片でやや上底ぎみの作りをしている。器面に刷毛目整形痕を有する。6は器台。口縁部と柄部ではわざかに裾部が広くなる。刷毛目整形を外面は全面に行い、内面は口縁部に横位の刷毛目が幅1.5cmでめぐる。色調は内外面ともに赤黄色を呈する。7は滾形土器。胴部の中位に1条の突帯を持ち、以下はやや直線的に底部へ伸び上底ぎみの底部をなす。頸部は縦まり外反ぎみに口縁部へ移行し、口縁部は平坦で内面端部が伸びぎみで外面端部はやや厚みを持つ均整のとれた滾形土器である。器面の調査は風化により不明瞭である。8は石盤の製作工程における、初期段階の資料として上げている。両側面を敲打し、母岩の粘板岩をカットした状況にある。9の砥石は6面を研ぎだしに使用し、中砥石程度のきめの細かさである。10は中央部の使用による研ぎだしによって、なだらかな輪部を形成している。裏面もやや凹みがみられ、使用の際に安定感を得るために裏面の調整を行ったと考えられる砥石である。11は打製の石礫である。先端が丸みを持ち、



第23図 1号土壤 出土遺物 (1~7は1/4・8~10は1/3)

両脚が不均等に作出さ

れているが剥離調整は、

上部から脚部にかけて

押圧剥離を丁寧に行い、

石材は黒曜石を用いて

いる。12は半基式の磨

製石器である。粘板岩

を石材の素材とし、剥

離面の凹凸を研ぎだし

によって消し去ってい

る。13は石壓製作行程

の第2段階の資料で断

面が長方形を呈するが、

打撲調整及び研ぎ出しまでは至っていない。

3号土壌 出土遺物 (第25図)

1は変形土器の口縁部である。口縁端部が肥厚し、外側がやや垂れぎみとなる。頸部に1条の突帯を付け、整形痕は土器の風化のため不明瞭で色調は内外面ともに淡赤黄色を呈する。2は変形土器の口縁部である。口縁端部を摘み上げて内湾ぎみとし、頸部から胴部に継位の刷毛目整形を行ない内面はナデ整形としている。器内の色調は、内外面とともに淡黄白色を呈している。

4号土壌 出土遺物 (第26図)

1は変形土器の口縁部で

ある。平坦な口縁に外側端

部が丸く厚みを持ち、器面

は風化して整形痕が不明瞭

である。2は変形土器の口

縁部で、平坦な口縁の中央

部がやや凹み外側端部に厚

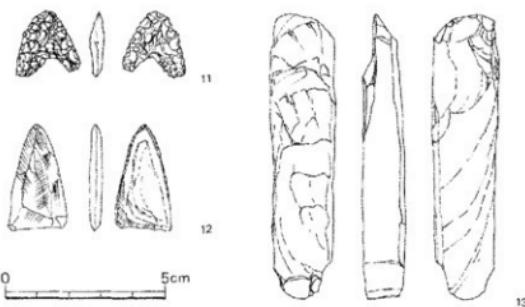
みを持っている。3は変形

土器の口縁部である。平坦

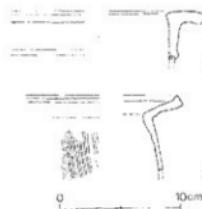
な口縁の中央部がやや凹み、

外側端部は尖りぎみとなり

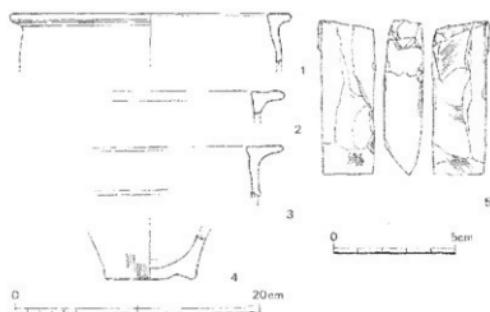
土器の器面は風化し整形痕



第24図 1号土壌 出土遺物 (2/3)



第25図 3号土壌 出土遺物 (1/4)



第26図 4号土壌 出土遺物 (1~4は1/4・5は1/2)

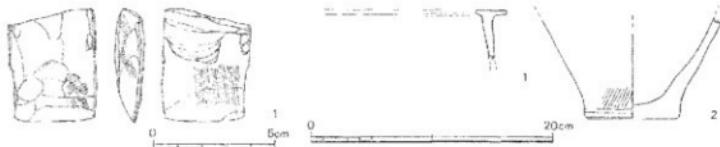
は不明である。4は壺形土器の底部である。底部の外底面に幅1cmで浅い溝をめぐらしている。5は石盤である。刃部と裏面の研ぎだしは行っているが、両側面の研ぎ出しは行なわず左部を欠損する。

5号土壙 出土遺物 (第27図)

1は石盤である。正裏面ともに剥離整形痕の上から研ぎだしを行い、正面、裏面、基部を滑らかにした扁平片刃石斧を作出し石材は粘板岩を用いている。

7号土壙 出土遺物 (第28図)

1は薄く平坦な口縁部を持つ壺形土器である。口縁は、内面端部が突きだしT字形の口縁を形成する。器面は風化のため整形痕が不明で内面はナデ整形を行っている。2は壺形土器の底部である。厚底で若干上底ぎみの器面で、風化が進行しやすさに磨毛目が新位の方向に付いているのが認められる。色調は内外面ともに暗赤黄色を呈している。



第27図 5号土壙 出土遺物 (1/2)

第28図 7号土壙 出土遺物 (1/4)

8号土壙 出土遺物 (第29図)

1は平坦な口縁部を持つ壺形土器である。頸部に突帯が一部残り、器面は風化が著しい。2は薄く平進な口縁部を持つ壺形土器である。口縁端部の内側が突き出る鉤形口縁をなし、外側端部は垂れぎみとなる。胴上部に断面三角形の突帯がめぐり、口唇部に3点の刻目が認められる。3は平底の壺形土器底部である。器面はナデ整形し、内面は風化のため整形痕が不明で色調は内外面ともに淡黄灰色を呈する。

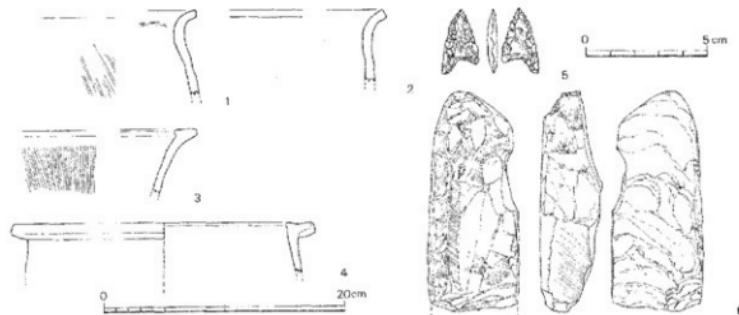


第29図 8号土壙 出土遺物 (1/4)

9号土壙 出土遺物 (第30図)

1は如意形口縁の壺形土器である。口縁端部は、丸く納め外面のナデ整形後に刷毛目を新位に施す。内面は、頭部に刷毛目を付けて整形し粗い胎土で長石粒が多量に混じる。器面の色調は、内外面ともに暗茶黄色を呈する。2は如意形口縁の壺形土器である。口縁端部は尖りぎみとなり外面にわずかに刷毛目が付く。粗い胎土で長石を多く含み器面の色調は茶灰白色を呈する。3は壺形土器の口縁部で口縁は平坦となし、内面5mmの厚さで直下に頸部と接合し、外面端部は若干凹みを持って一巡する。

刷毛目はおおむね縦位の方向に付け、器面の色調は外面が灰茶色で内面は暗赤黄色を呈する。4は厚みのある平坦な口縁をなす壺形土器である。短い口縁の中央がやや凹み器面の色調は内外面ともに明褐色を呈し、整形痕は風化のため不明である。5は黒曜石製の局部磨製石器である。正面の左脚だけを延ばし、右脚は抉りの延長で留め正面の中央部のみに研磨をかけている。6は抉入片刃石斧の基部の残存品で左側縁は敲打技法による作出を行う。正面は、剥離調整の後に研ぎだしを行っている。抉入部は、敲打部分を中心にして、周囲を研ぎだしている。

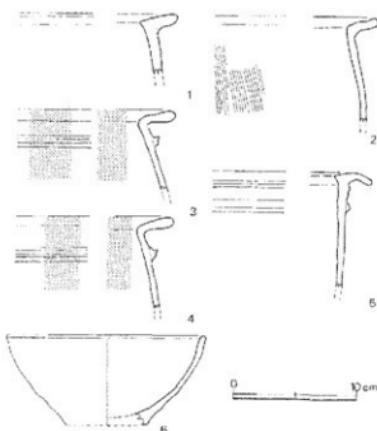


第30図 9号土塙 出土遺物 (1~4は1/4・5, 6は1/2)

10号土塙 出土遺物 (第31図)

1は壺形土器の平坦な口縁の内側に若干の伸びがあり、外側の端部は厚みを持つ。器面の色調は外面が橙色で内面は茶系の橙色を呈し、内面はナデ潰し整形を行い外面は風化のため整形痕が不明である。2は口縁端部がやや厚く平坦な面に凹みをなす壺形土器である。外面は刷毛目整形、内面はナデ整形を行った器面の色調は内外面ともに淡赤色を呈している。3は月漬の壺形土器。口縁は平坦で外側端部が厚く垂下ぎみとなり、胴上部にM字突帯が1条貼り付けられている。4は2と同一個体の壺形土器と思われるが接合面が確認できない資料である。5は、平里な口縁の外側端部が垂下した壺形土器である。口縁の内側端部は薄く伸び、胴上部に断面三

角形の突帯を1条付けている。器面の整形はナデ整形を行っている。6は月漬の鉢形土器で器形は底部から内湾して立ち上がり、口縁部へ移行し、口縁端部は丸みを持っている。器面全体が朱色を呈する。



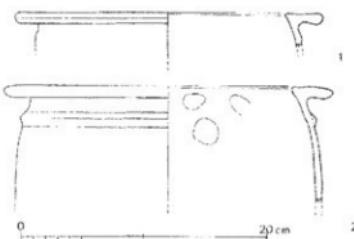
第31図 10号土塙 出土遺物 (1/4)

11号土塚 出土遺物 (第32図)

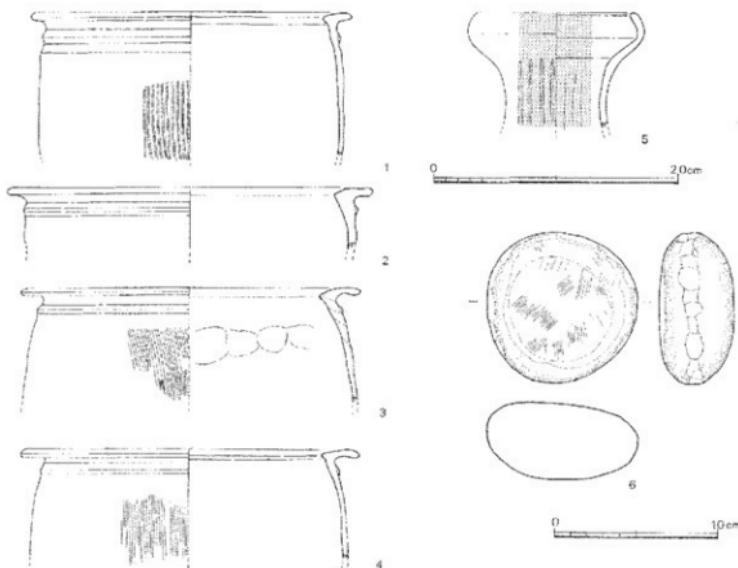
1は平坦な口縁部をなす壺形土器である。口縁端部が肥厚し、器面の色調は内外面ともに淡灰色を呈している。2は平坦な口縁部をなす壺形土器で内側に口縁端部が伸び、外側口縁部は肥厚してやや垂下ぎみとしている。外面にはわずかに刷毛目整形痕が残り、胴上部は断面三角形の突帯を1条付けて内面は指揮さえとナデ整形痕が認められる。器面の色調は外面が茶灰色で内面は灰黄色を呈する。

12号土塚 出土遺物 (第33図)

1は短く平坦な口縁とする壺形土器で口縁部中央に厚みがあり、内側に向かって口縁端部がやや伸び、胴上部に断面三角形の突帯が1条付める。胴部に縦位の刷毛目整形痕が残る。2は平坦な口縁をなす壺形土器である。外側の口縁端部にやや厚みを持ち、胴上部に突帯が1条めぐり器面の色調は、外面が黄灰色で内面は暗黄灰色を呈している。3は、薄く平坦な口縁の壺形土器である。口縁がやや内側に伸び外側は垂下ぎみとし、胴上部に形骸化した突帯が1条付く。刷毛目は外面に縦位に施して



第32図 11号土塚 出土遺物 (1/4)

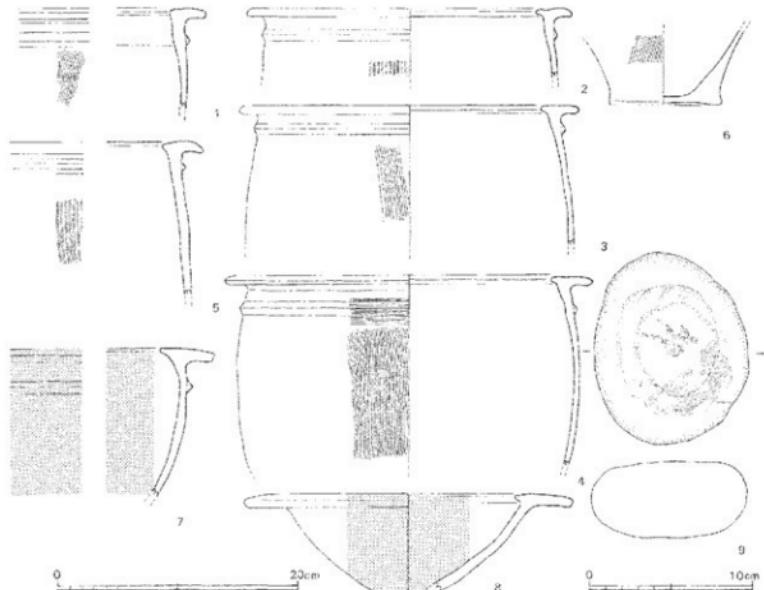


第33図 12号土塚 出土遺物 (1~5は1/4・6は1/3)

いる。4は3より更に薄い平坦な口縁の変形土器で口縁が内側に伸び、外側は垂下する。形散化した突帯を1条めぐらし、器面の整形は外面を刷毛目とし内面はナデ彫形を行っている。5は袋状口縁の壺で頭部から外反ぎみに口縁部へ伸び、口縁部で内湾し口縁端部へ移行し端部は、丸みを持つ。外面にヘラナデの痕跡が残り、口縁部外面に朱を塗り頸部は、ヘラ状整形痕が残る。6は、敲打とスリの用途に用いられた叩き石で当初はスリ石で用いられているがスリの部分は内円の外に残り、叩きが中央と側面全周に付いている。

13号土壤 出土遺物（第34図）

1は平坦な口縁部をなす変形土器である。口縁部は逆L字形とし、胴上部に断面三角形の突帯が1条めぐり外面の腰部にわずかに刷毛目が残る。内面はナデ整形を施し色調は外面が暗灰黄色で内面は白黄色を呈している。2は薄く平坦な口縁部をなす変形土器で口縁の内側が伸び、外側端部は垂下ぎみに丸く納め、断面三角形の突帯を胴上部に1条めぐらしている。外面はナデ整形後に刷毛目調整をし、内面はナデ整形としている。器面の色調は、外面が暗灰黄色で内面が暗橙色を呈する。3は、薄く平坦な口縁部をなす変形土器である。口縁の内側が伸び、口縁の外側の端部はやや垂下し丸く納め断面三角形の突帯を胴上部に巡らしている。器面の色調は内外面ともに暗黄色を呈し、縦位の刷毛目を外面に施し、内面はナデ整形としている。4は薄く平坦な口縁部をなす変形土器で口縁内側がやや



第34図 13号土壤 出土遺物（1～8は1/4・9は1/3）

伸び、外側端部は垂下ぎみとなり胴上部に断面三角形の突帯をめぐらし、外匝をきめの細かい刷毛目で整形し内面はナデ整形として胴部の張りがやや強くなる。器面の色調は、外面が暗黄色で内面が黒灰色を呈する。5は薄く平坦な口縁の壺形土器である。口縁部は内側にやや伸び、外面端部を垂下させ胴上部に断面三角形の突帯をめぐらし外面は刷毛目とし、内面はナデ整形を行っている。器面の色調は外面が暗橙色で内面は、暗灰色を呈する。6は平底ぎみのやや上底の底部とする壺形土器である。外面の底部から立ち上がり2cmはナデ整形を行い、上部は継位の刷毛目整形としている。7は長く平坦な口縁部の壺形土器である。丹が全面に塗られていたと見られるが部分的に残るのみとなっている口縁部の器形は、内側端部が伸び外側の口唇部に浅い凹みがめぐらし断面三角形の突帯を胴上部に付けている。器面の色調は丹が剥落し、暗黄灰色を呈する。8は長く平坦な口縁部をなす高环形土器である。口縁の内側端部が伸び外側は垂下し、环部は半球形としている。外面は丹が剥落して暗黄色を呈する。内面は丹がそのまま残る。9は正裏面を叩き石として使用している。正面にスリ石としての使用痕も認められる。

14号土壤 出土遺物（第35図）

1は厚みのある平坦な口縁の壺形土器である。口縁端部に3mm幅の刻目をめぐらし外面の体部に継位の刷毛目が残り内面はナデ整形としている。器面の色調は、外面が暗黄灰色で内面は黒灰色をなす。

15号土壤 出土遺物（第36図）

1は平坦な口縁部の壺形土器で口縁部は比較的薄く、長めである。口縁外側の端部は丸く納めた逆L字口縁としている。器面の色調は、外面が黄褐色で内面は肌色を呈する。2は平底をなす壺形土器の底部で若干上底ぎみの底部とし、立ち上がりから刷毛目整形を行っている。器面の色調は外面が黄土色で内面は黒灰色を呈する。



第35図 14号土壤 (1/4)



第36図 15号土壤 出土遺物 (1/4)

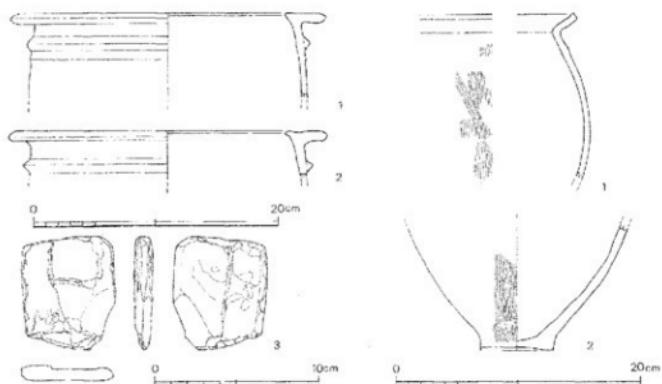
16号土壤 出土遺物（第37図）

1は平坦な口縁をなす壺形土器である。口縁外側の端部が肥厚し、垂下ぎみとし器面の整形痕は風化のため不明。胴上部に断面三角形の突帯を付し、器面の色調は内外面ともに明黄褐色を呈する。2は平坦な口縁をなす壺形土器で口縁端部の内側がやや伸びて外側端部は厚みを持ってやや垂れぎみである。胴上部に断面三角形の突帯を付け、器面の色調は内外面ともに赤黄色を呈する。3は扁平な石盤の製作工程段階で、上面と両側面及び正裏面に研ぎを行い石材に熱板岩を使用している。

18号土壤 出土遺物（第38図）

1は内渦した口縁部に端部をつまみ出した口縁とする壺形土器。胴部に細い刷毛目が残り、内面の整形痕は風化のため不明で器面の色調は内外面とも赤褐色を呈する。2は平底の壺形土器である。中

中央部が若干上げ底ぎみとなり、刷毛目が底部から肩部へ縱位に付く。器面の色調は外面が暗赤色で内面が淡黄色を呈している。

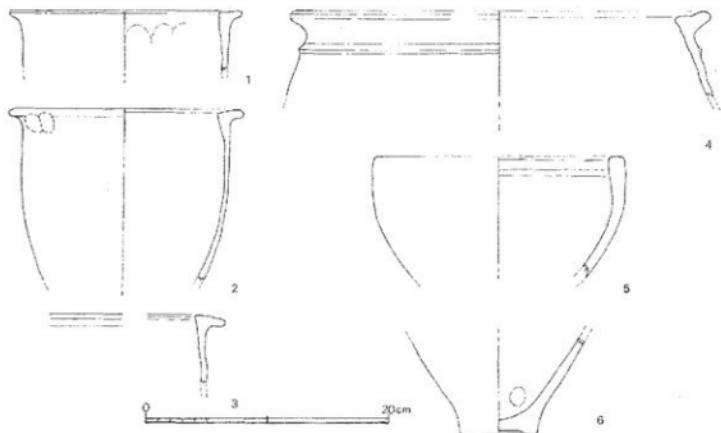


第37図 16号土塚 出土遺物(1, 2は1/4・3は1/3)

第38図 18号土塚 出土遺物 (1/4)

21号土塚 出土遺物 (第39図)

1は短く平坦な口縁部の壺形土器としている。逆L字口縁部を形成し、外面は風化して器面調整が不明で内面はナデ整形を行っている。色調は、外面が赤褐色で内面は暗茶褐色を呈している。2は短く平坦な口縁部の壺形土器である。逆L字口縁部を形成し、口縁はやや上向きに伸び、端部は丸くお

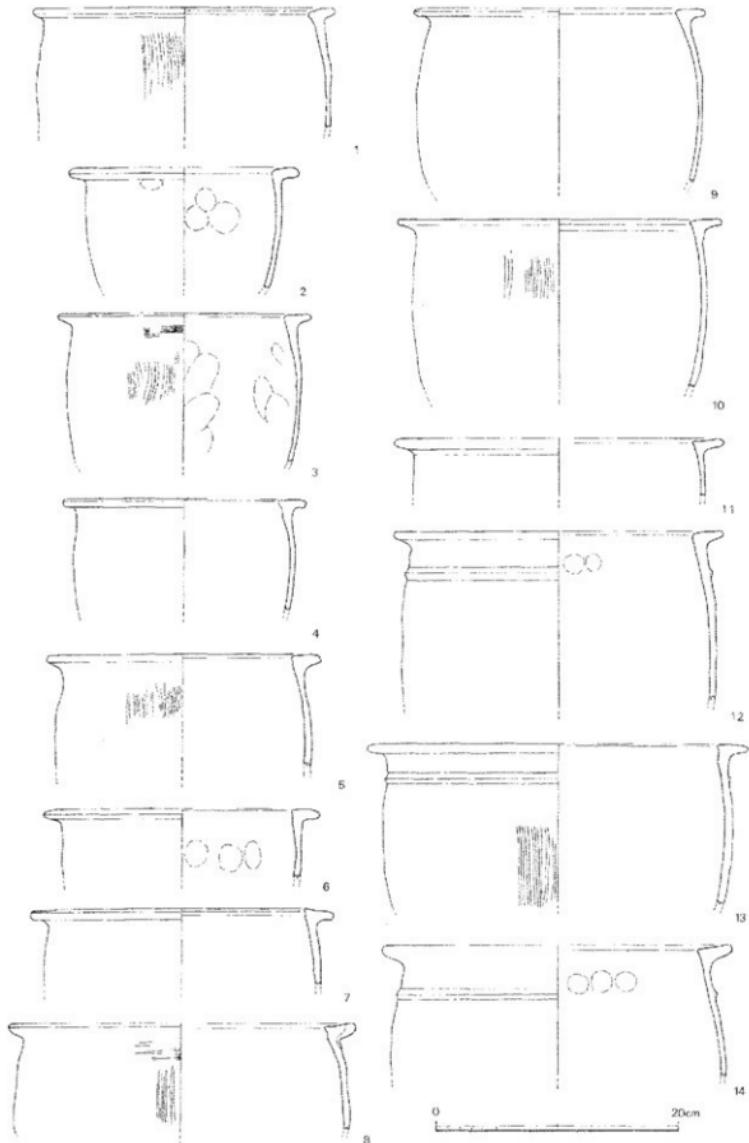


第39図 21号土塚 出土遺物 (1/4)

さめ外面は風化のため器面調整が不明で内面はナデ成形としている。色調は外面が淡黄褐色で内面は暗黄黒色を呈する。1と似かよるが口縁部に厚みがあり、やや長い。3は平坦な口縁部の変形土器で逆L字口縁部をなし、下方に伸び口縁外側の端部は丸く納める。外面は風化し、器面調整不明で内面はナデ整形とし、色調は暗黄褐色を呈する。4は平坦な口縁部の変形土器である。口縁部途中が凹み外側の端部に厚みを持ち、胴上部に断面三角形の突帯を付けている。器面は内外面ともに風化し、整形痕不明で色調は内外面とも淡黄褐色を呈する。5は鉢形の土器である。器形は口唇部を平坦にナデ整形し胴部は内湾して口縁部へやや直立ざみに内傾し、口縁端部に厚みを増す。色調は外面が赤黄色で内底面は黄褐色としその周囲は黒色を呈する。6は変形土器の底部で厚底部ざみの上底をしている。内外面は風化し、整形痕が明瞭でない。色調は外面が赤黄色、内底面は黄褐色、周囲は黒色を呈する。

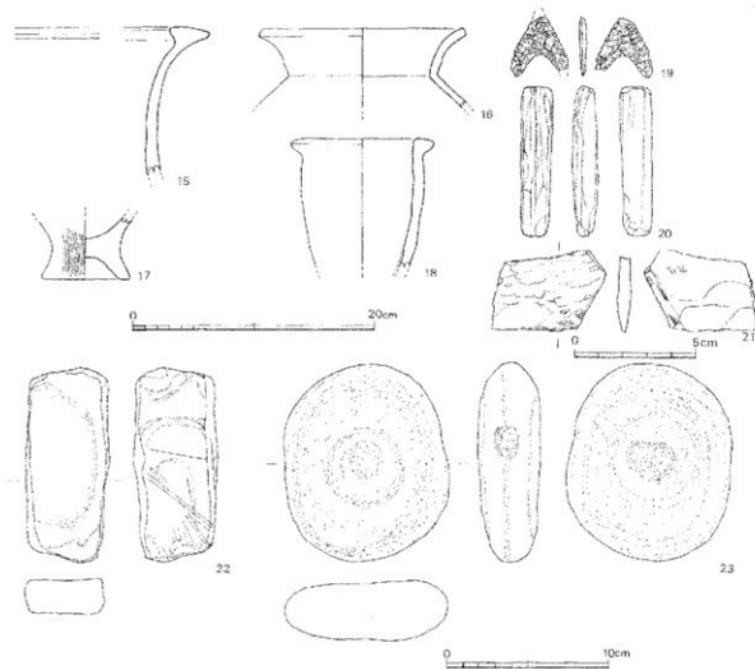
22号土壤 出土遺物（第40図、第41図）

1は厚みのある平坦な口縁の変形土器である。口縁部が上方へ移行し、外側の端部を丸く納める。縦位の刷毛目を付けるが、器面の風化のため明瞭ではない。内面はナデ整形とし色調は外面が暗黄色で内面は黄灰色を呈する。2は、平坦な口縁部の変形土器で口縁は短く厚みがあり上方へ移行し、外側の端部は丸く納める。器面の整形痕は外面は風化し、明瞭でなく内面は黒色を呈している。3は平坦な口縁をなす変形土器で口縁部は、短く比較的薄で作り外側端部を丸く納める。刷毛目整形を縦位に行い頭部は、横位のナデ整形とし内面は指押さえによる痕が付く。器面の色調は外面が茶褐色で内面は明灰黄色を呈している。4は平坦な口縁部を持つ変形土器である。口縁部は短くやや内側に伸び、外側の端部は丸く納める。器面の外面は風化して整形痕は不明で内面はナデ整形とし、色調は器面の外面が赤褐色で内面は明黄色を呈する。5は平坦な口縁部を持つ変形土器である。口縁は短く中央部で凹み外側の端部にやや厚みを増し、内側の口縁端部がやや伸び出す。器面の色調は、内外面ともに暗黄褐色を呈する。6は平坦な口縁部を持つ変形土器で口縁部は内側へやや伸びだし、外側はやや下がりざみに端部を丸く納める。器面は内外面ともに風化し、整形状況は不明で内面の指押さえがわずかに認められ器面の色調は外面が赤褐色で内面は淡赤褐色を呈する。7は平坦な口縁をなす変形土器である。口縁部は短くやや外側が下方に移行し端部は丸く納め、内側はやや伸び出す。内外面ともに風化し、整形痕は不明で器面の色調は外面が赤褐色をなし内面は暗赤褐色を呈している。8は平坦な口縁を持つ変形土器で口縁は、内側が伸び外側の端部は丸く納める。口縁部の直上に回転台成形におけるナデ整形痕が残り、比較的厚みのある口縁部とし、外面の整形痕は端部を横位のナデと以下を縦位の刷毛目で整形する。器面の色調は外面が茶褐色で内面は灰茶色を呈する。9は平坦な口縁を持つ変形土器で口縁は内側がやや伸び、外側の端部は丸く納める。器面の整形は風化のため不明瞭で色調は外面が赤褐色をなし内面は暗黄褐色を呈する。10は平坦な口縁をなす変形土器である。口縁部は比較的長く、内側へ端部がやや伸び外側の端部は丸く納める。器面は外面は風化し部分的に刷毛目整形痕が確認でき、色調は外面が暗黄褐色で、内面は灰白色を呈している。11は平坦な口縁をなす変形土器である。口縁内側の端部がやや伸び外側は上方に向かって厚みを増し、端部へ移行し丸く納める。器面の外面は風化し、整形痕は不明で内面はナデ整形とし、器面の色調は外面が淡橙色で内面は暗橙色を呈する。



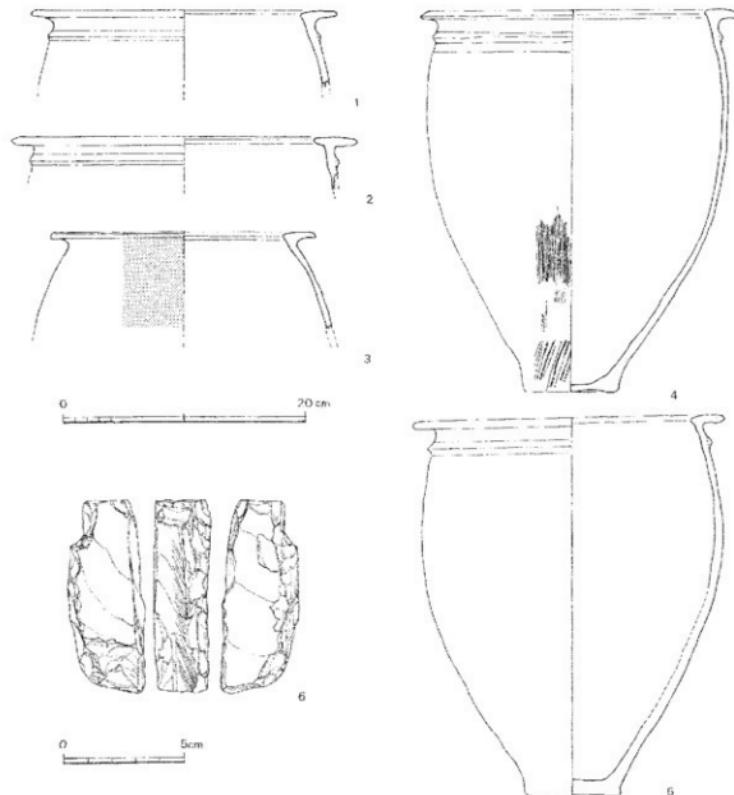
第40図 22号土壤 出土遺物 (1/4)

色を呈する。12は平坦な口縁をなす壺形土器である。口縁は比較的長めで中央部が肥厚し、端部は丸く納め胴上部に断面三角形の突帯を付けている。器面の外面は風化し整形痕は不明で内面は指押さえの痕が認められ、色調は内外面ともに淡黄褐色を呈する。13は平坦な口縁をなす壺形土器で口縁部は中央が肥厚し、外側の端部は丸みを持つ。胴上部に断面三角形の突帯を付け、外面は刷毛目整形を継位に行い内面はナデ整形とし色調は外面が明黃褐色を呈し、内面は淡い赤褐色を呈する。14は平坦な口縁をなす壺形土器である。口縁部は内側へやや伸び上方に向かい中央で凹んで厚みを増しながら外側の端部へ移行し、端部は丸く納める。胴上部に断面三角形の突帯を付け、外面に継位の薄い刷毛目痕があり内面はナデ整形で指押さえ痕が残る。色調は内外面ともに暗茶褐色を呈する。15は壺形土器で長い頸部は直線的に立ち上がり口縁部へ移行する。口縁部は、内側へ突出し中央部が肥厚して外側の端部は丸く納める。内外面ともに器面が風化し、整形痕が不明で器面の色調は外面が赤白色で内面は白灰色を呈する。胎土は粗く長石粒3mm程度が多量に入る。16は短頸口縁の壺形土器である。頸部から口縁部は外反して口縁端部を丸く納める。器面は風化して整形痕が不明で色調は外面が赤褐色を呈し、内面は赤黄色を呈する。17は上底の壺形土器である。外面に継位の刷毛目が付き、器底の色調



第41図 22号土塚 出土遺物 (15~18は1/4・19~21は1/2・22, 23は1/3)

は外面が赤褐色で内面は黒色を呈する。18は擬無文土器である。口縁の上面は平坦とし、口縁部内側に粘土帯を貼り付けて土器整形している。器形は、胴部下位は直線的に外方に伸び中位で内傾きみに移行し、厚みのある口縁へいたる。器面は内外面とともにナデ整形として色調は黄褐色の外面で内面は灰白色を呈する。19は黒曜石製の石鏃である。両側縁から全局に押圧剥離を繰り返し行い、先端部は一部欠損している。20は石鑿製作工程4段階の資料で正面と右側面、裏面に研ぎだしを行うが刃部の作出部分は研ぎだしを行わず石材は粘板岩を素材とする。21は刃部を両刃に研ぎだしを行い、上部は敲打痕を残し裏面は全面に研ぎ出し痕が認められる石庖丁で使用石材は硬質砂岩を利用している。22は砂岩を用いた砥石で橢円形状に正面を使用している。裏面は11本の細く鋭利な傷が付き、鋭利な傷は金属器の使用によって付いたものと考えられる。23は正面と裏面の右側面に敲打による凹みが認め



第42図 23号土塙 出土遺物 (1~5は1/4・6は1/2)

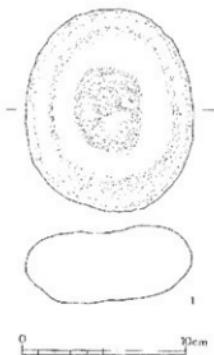
られる。左側面はスリによる摩耗が残る。

23号土器 出土遺物 (第42図)

1は薄く平坦な口縁を持つ壺形土器で、口縁は内側がやや伸び胴上部に断面三角形の突帯が付く。外面は風化し刷毛目整形がわずかに残る程度で、内面はナデ整形とし器面の色調は外面が暗灰色で内面は暗黄色を呈する。2は鉢形口縁をなす壺形土器である。口縁は内側が突きだし、外側はやや垂下し胴上部に断面三角形の突帯を付けている。器面の色調は、外面が暗赤褐色で内面は淡赤褐色を呈し内外面ともに風化し並形状況は不明である。3は丹塗の無頸壺である。平坦な口縁とし、外側の端部をナデによる面取りをしている。色調は外面は朱色で内面は朱色が剥落し、暗黄赤褐色を呈する。4は平坦な口縁部の壺形土器である。口縁は内側に突きだし、外側は若干垂れぎみとなり、胴上部に断面三角形の突帯が付き底部はやや上底の平底としている。器形は底部から外方に胴部中位まで伸び中位で張り、中位から口縁まで内湾する。刷毛目は底部から胴部中位まで付くが、外面の中位から口縁部はナデ整形とし、内面はナデ整形としている。器面の色調は、茶赤褐色を外面は呈し内面は底面から胴部の1/3までが黒色で2/3は明黄褐色を呈する。5は平坦な口縁の壺形土器である。口縁部は内側に突きだし、外側は端部にやや厚みを持つ。胴上部に断面三角形の突帯が付き底部は平底とし、器形は底部から外方に胴部2/3まで伸びて胴部上位で張り、内湾して口縁部へ移行する。器面は内外面ともにナデ整形を行う。色調は、外面が暗黄赤褐色を呈し内面は黃灰色を呈する。6は石盤の製作行程4段階の資料である。両側面については一部研ぎだしを行ったが、刃部と基部については剥離調整で留まり断面はカマボコ形を呈する。石材は粘板岩を使用する。

柱穴90 出土遺物 (第43図)

1は正面に凹みのある凹石である。



第43図 柱穴90号出土遺物 (1/3)

(4) 小結

平成12年度は芦辺町深江鶴亀触字不條地区の調査面積300m²について実施し、道傍は溝2条と土墻24基と柱穴94基を確認している。この内、時期判断のできる遺物が出土した遺構について取り上げて報告を行った。

1号溝は弥生時代前期末として捉えられ、溝内より如意形口縁の土器と半鳥系の土器が共伴している。石器では、石盤の製品及び未製品の出土があり石盤製作に関わる時代が前期末から行われていることを確認した。石盤の製作工程については、2層・3層出土の石盤製作段階における資料があり、本文中の製作工程の補足説明として1段階から5段階に分けて分類した行程を付け加えておきたい。1段階は母岩からの剥離を行う前に、必要とする部分に敲打を加えて表面の調整を行い母岩から切り離す。2段階は切り離した素材を側面と正面に調整剥離を行い石盤の輪郭を形くる。3段階は上部

と下部に剥離調整を行い基部と刃部の輪郭をつくる。4段階は裏面・側面の研ぎを行う。5段階は刃部・基部・側面・正面の6面を研ぎ完成させる。以上の行程を踏まえて製作を行っている。

2号溝は弥生時代前期末から中期初頭の時期にあたり、1号溝より一時期遅くまで使用されていた状況が調査の結果判明した。遺物は如意形口縁の壺形土器・城ノ越式土器の壺形土器と石盤・柱状抉入片刃石斧・砥石・凹石・スリ石等が出土している。

土塙は1号から24号を確認し、丹塗の上器が出土した遺構として10号・12号・13号・23号があり、半島系土器の出土した遺構に22号土塙が上げられる。土塙については、時期が特定できる遺構について補足したい。

1号土塙は、弥生時代中期前半の壺形土器・器台・壺形土器と石盤・砥石・磨製石鏡・打製石鏡等が出土している。3号土塙は、口縁部の外側が垂下ぎみの土器資料と跳ね上げ口縁をなす上器資料が出土している。時期的には弥生時代中期の須玖I式の新段階に比定される。4号土塙は、須玖I式土器段階の壺形土器と石盤が出土している。5号土塙は、石盤の完成品が出土している。遺構は4号土塙に切られており弥生時代中期初頭が考えられる。7号土塙は、須玖II式段階の壺形土器が出土している。8号土塙は、須玖II式段階の壺形土器が出土しているが7号土塙に切られた状況から8号土塙が若干古くなる。9号土塙は、弥生時代前期末から中期初頭の城ノ越式土器と柱状抉入片刃石斧と局部磨製石鏡が出土している。10号土塙は、弥生時代中期後半の須玖II式の丹塗の壺形土器と鉢形土器が出土している。11号土塙は、弥生時代中期中頃の須玖I式の新段階の壺形土器が出土している。12号土塙は、弥生時代中期後半の須玖II式の壺形土器と丹塗の袋状口縁の壺形土器に伴ってスリ石が出土している。13号土塙は、弥生時代中期後半の須玖II式の壺形土器と丹塗の壺形土器及び月流の高坏がスリ石と伴に出土している。14号土塙は、弥生時代中期初頭の断面三角形の平坦LII縁に刻目を付けた城ノ越式土器の壺形土器が出土している。15号土塙は弥生時代中期前半の須玖I式の壺形土器が出土している。16号土塙は、弥生時代中期後半の須玖II式の壺形土器が出土している。18号土塙では、弥生時代中期後半の壺形土器が出土している。21号土塙は、須玖I式の壺形土器、鉢形土器が出土している。22号土塙は、須玖I式の壺形土器・壺形土器に伴い半島系土器が出土し、石器に石盤・石鏡・石鏡・低石・凹石・凹石が出土している。23号土塙は須玖I式の新段階から須玖II式の壺形土器と壺形土器及び石盤が出土している。柱穴ではPt90から凹石1点の出土があった。以上のような状況で最も古い遺構が9号土塙にあたり、1号溝と同時期に存在していたことが考えられる。その他の遺構は弥生時代中期前半から中期後半の範囲で営まれていたことが今回の調査で確認された。

参考文献

- 武末純一・柳田康謙・玉永光洋・西健一郎著『弥生文化の研究第4巻弥生土器II』「2九州地方の弥生土器」叢書 金闇 恵／佐原 真 発行所 雄山閣出版株式会社1987

図 版



調査区全景航空写真



調査区全景（南から）



調査風景



調査風景



1号溝 挖出状況（東から）



1号溝 横断土層



1号溝 遺物出土状況



2号溝 挖出状況（東から）



2号溝 横断土層



2号满 遗物出土状况



4号土壤 横断土层



6号土壤 横断土层



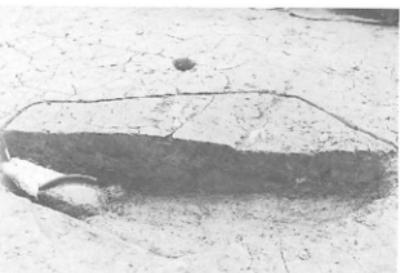
9号土壤 遗物出土状况



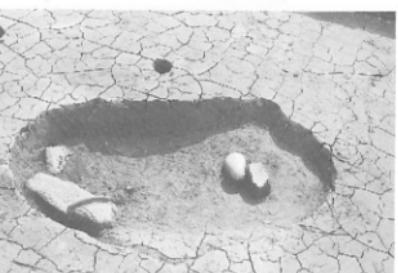
10号土壤 横断土层



10号土壤 遗物出土状况



11号土壤 横断土层



11号土壤 遗物出土状况



12号土壤 遗物出土状况



13号土壤 横断土层



13号土壤 遗物出土状况



16号土壤 遗物出土状况



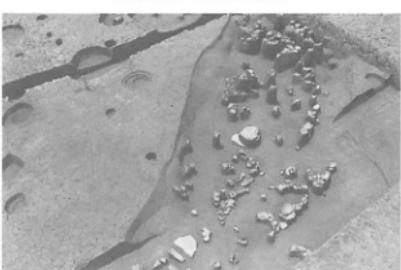
21号土壤 横断土层



21号土壤 遗物出土状况



22号土壤 横断土层



22号土壤 遗物出土状况



23号土壤 横断土層



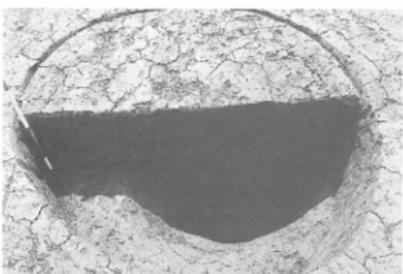
23号土壤 遺物出土状況



24号土壤 横断土層



柱穴51 石製硬盤検出状況



柱穴61 横断土層



柱穴71 横断土層



11号土壤 イノシシの歯出土状況



3層出土遺物



遺跡遠景（西から）

2. 大川地区の調査

(1) 調査概要 (第44図)

大川地区は遺跡の南東部にあたり、平成7年度及び平成10年度の調査では初期貿易陶磁やイスラム陶器、滑石製品などが出土して、古代から中世にかけて何らかの公的施設があるのではないかと考えられている地域である。この区域には1~8区の調査区を設定した。

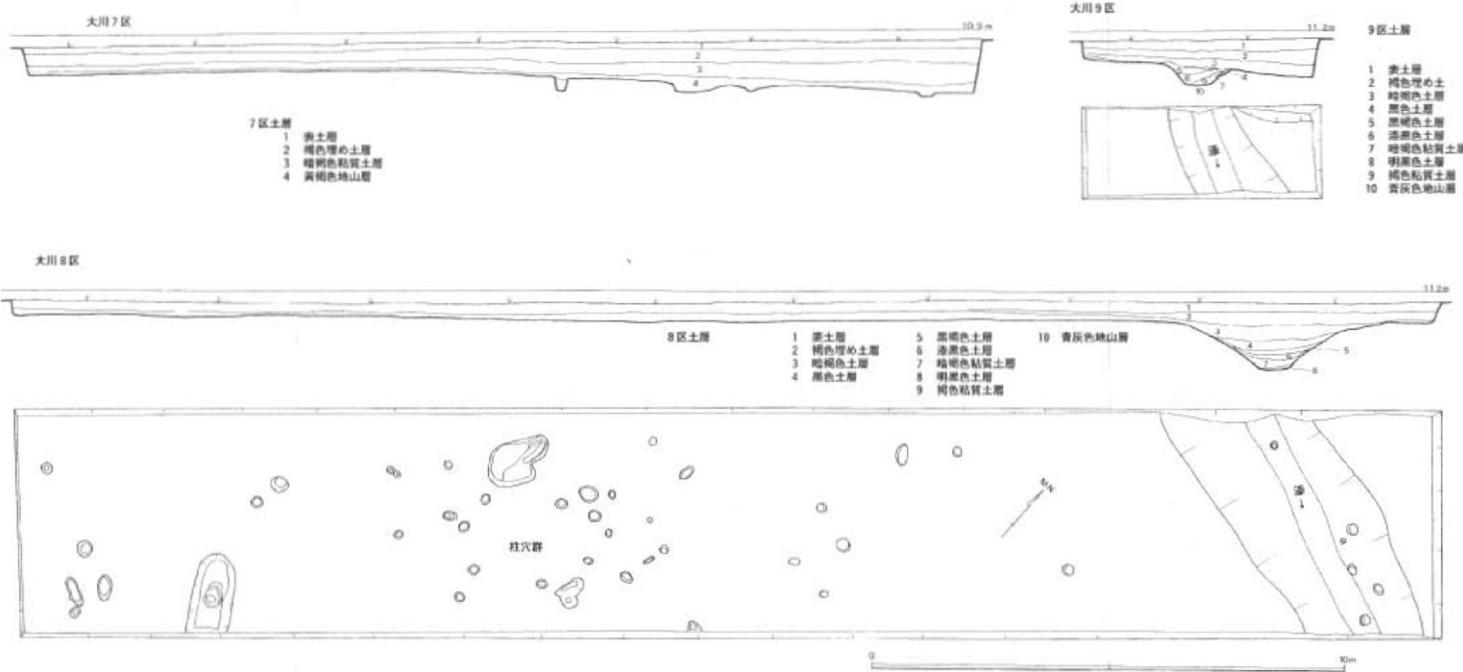
1・2区は標高14~15mの水田南側に2m×20mの面積で設定した。表土層の下はすぐに黄褐色粘質土層で遺物包含層は見られない。1区は東西にゆるく傾斜し、水田造成の前は鍬頭畑だったことがわかる。2区は東側に傾斜し、埋め土が堆積しているが、この中に若干の弥生土器が含まれている。3区は1・2区の東側に隣接する水田で、標高13mと一段低くなっている。2m×25mの面積で東西に設定した。西側から東側にかけて傾斜し、中央部から急に落ち込んでおり、2枚の壠が1枚に水田化されている。西側はかなり削平を受けており、表土層下の浅いところから2層の暗褐色土層が見られ、弥生土器の小破片がわずかに残っている。また、3層の褐色粘質土層の部分は柱穴が数個確認できる。弥生期のものと考えられるが、断定は出来ない。5~7区は平成10年度調査区の南側に、古代関連のものが拡がるかということで設定した。この水田は以前、金魚の養殖が行われており、5・6区はほとんど搅乱されていた。7区は表土層及び埋め土の下に暗褐色粘質土層が見られ、土師器、瓦質土器片や滑石片、須恵器片などが出土した。内容的には前回の調査で得られたものと一致しており、古代の範囲が拡がっていることが確認された。8区は深江池の南東約100mの標高11mの畑に5m×30mの面積で北東に設定した。ここも鍬頭畑が削平されており、土層は南から北方向に傾斜している。南側は表土層の下からすぐに9層の褐色粘質土層が見られ、この層から黒曜石剝片やナイフ形石器が出土している。6区の3層暗褐色土層は若干くほんだ状況が観察され、中世の土師器片や滑石片が流れ込んでいる。この部分を掘り進めて行くと、青灰色地山層を掘り込んだ濠が確認された。上面は削平されているが、上面幅約4m、深さ1mで、4層の黒色土層からは弥生中期の土器が出土した。方向については西側方向に延びているが、東側については確認できない。以下主要な試掘場について概観する。

(2) 土 層 (第45図)

今回の調査区はほとんどが2次的な造成が行われており良好な基本土層になるものがない。耕作土層のすぐ下に弥生時代の包含層か旧石器を含む層がいきなり現れる状況である。古代の遺物が出土した7区は、比較的の包含層がよく残っていた。耕作土層の下に褐色の埋め土があり、その下に暗褐色粘質土の包含層が見られ、4層である黄褐色地山層には風化礫や黄色い粒子の砂利状のものが含まれる。この土層の状況は前回の調査区の土層にも一致している。8区は新たに弥生の塗が確認された地点であるし、2層は耕作土層と埋め土である。3層は暗褐色土層で中世の遺物が出土するが、濠の部分では少しくほんでいる。遺物は特にこの部分に集中する。濠以外の区では3層の下にここで9層とした



第44図 大川地区調査区域図（1/2000）



第45図 大川7・8・9区土層及び造模実測図 (1/80)

旧石器の遺物を含む褐色粘質土が見られる。漆の土層は4層の黒色土層から弥生中期の土器片が出土する。その以下には5層のややさらりとした黒褐色土層、6層はさらりとした漆黒色の土層、7層は5層に比較的似ているものの、少し黄色の度合いが強い層、8層は明黑色土層が堆積し、10層の青灰色地山層に達している。遺物は4層だけに見られる。このことは、漆は中期の早い段階で掘られ、一期期使用された可能性が強いと考えられる。

(3) 遺構 (第45図)

大川地区におけるはっきりした遺構は、8・9区で検出の漆と8区の柱穴だけである。8区は1～5の地山層に柱穴が40個確認できるが、その中には小穴も含まれる。弥生時代の包含層が削平されているのでほとんど時期が明確なものはない。8区2の柱穴から1点だけ弥生土器の破片が含まれていただけである。漆は一番北東側の8区6で東西方向に検出された。上面は削平されているが、約3.3mの幅を有し、深さ約1m、下面是約0.55mの幅で断面はV字に近い形状を呈する。北側の東寄り斜面に柱穴が4個と下面の両端に2個見られるが、性格等については不明である。漆の方向を探るために、8区から西側に10m離れた同じ畑に5m×2mの9区を設定した。この区の下面是8区の下面と比較すると約48cm高く、上面幅が1.30mと狭くなっているが、下面が上がった分、上面が削平を受けていることが分かる。東側の延長を狙って8区から約9m離れた、一段低い水田に1m×5mの10区を設定したが、埋め土だけでは漆は検出できなかった。今後は東側の同レベルの水田で東方向の漆を確認する必要がある。漆の時期については先にも述べたが、弥生中期前半に掘られ後半には埋まつたものと考えられる。

(4) 遺物 (第46・47図)

上器 (第46図1～12)

1～6は8・9区4層出土の土器である。1は平坦な口縁を呈した須玖式上器で外側に傾斜している。内側はやや尖り気味に丸くおさめられている。胎土は石英粒を多く含み、色調黄褐色、全体に摩耗している。2は口縁平坦部が1よりも小さく器形も小ぶりである。口縁外側の端部は丸く尖り気味におさめられている。胎土には石英や白と赤の砂粒を含み色調は茶褐色を呈する。3は湾曲した口縁部で、口唇部はへラナデしたように平坦である。しかし、一方の端部も丸くなってしまっており鉢になるのが器形が不明である。胎土には石英、雲母、長石を含みよくしまっている。色調は黄褐色を呈し、焼成良好。4は須玖式土器の底部でわずかにあげ底である。外側に丁寧なハケ目調査が施されている。胎土には石英粒を多く含みよくしまっている。色調は褐色で焼成良好。5・6は高杯脚部である。5は身の内側と脚部にわずかな丹塗りの痕跡をとどめる。胎土には石英と赤色砂粒が目立つ。6は脚部の中央部分だけで、形状は5よりも小さい。時期的には弥生中期と考えられる。7は8区3層からで瓦質のすり鉢片である。8～11は7区3層出土の遺物である。8・9は須恵器で外側に格子目叩き、内側に同心円状の叩きが見られる。10は須恵器の壺口縁で端部はシャープである。外側にはわずかに自

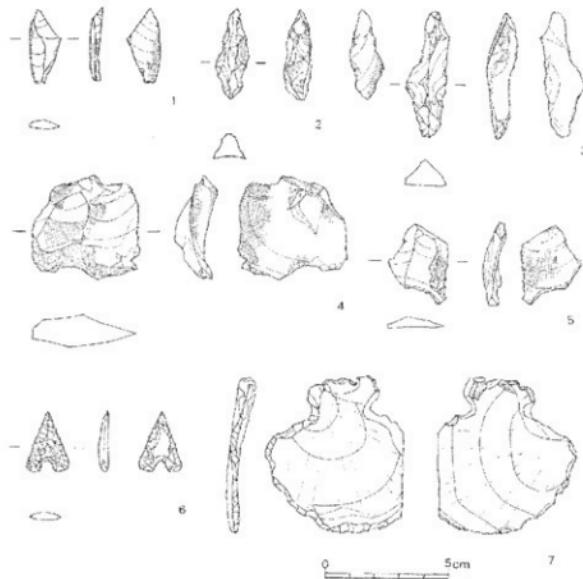


第46図 大川7・8・9出土の遺物実測図 (1/2)

然粧が見られる。11は瓦質の瓶口縁で端部は丸くなり外に一条の細い線が巡る。断面を見ると外は灰色、中は淡茶色を呈している。中世の所産と考えられる。12は8区3層出土の龍泉窯系の皿である。釉は厚くかかり内外に貫入が認められる。色調は灰緑色を呈する。

石器（第47図）

石器は大川地区の石器は8区からの出土である。1は良質の黒曜石製の小形ナイフ形石器である。基部両端は丁寧に刃漬しが施されている。刃部はうすく斜行して先端部をわずかに欠く。現存長3cm、厚さ4mm、重さ1.1g。2・3は剥片利用の尖頭状剥片石器である。2は厚みのある剥片を利用し、全体的にやや粗い仕上げである。断面は三角形で、基部はやや丸く、先端は鋸くなっている。長さ3.8cm、厚さ1cm、重さ3.4gを測る。3は主要剥離面の平坦部が湾曲している。基部の両側は丁寧な剥離を行っているが、中程から先端部にかけては大きな剥離だけで未製品の感じもする。4は良質の小形角礫黒曜石を打ち欠き、上面と下面に自然面を残す。左面に1回の剥離、右面に2回の剥離を施している。5は下面に自然面を残す剥片で両側に使用痕が認められる。6は2層出土の石鏃である。全體を丁寧に剥離してシャープに仕上げている。長さ2.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.9gを測る。7は且層



第47図 大川地区出土遺物実測図（1／2）

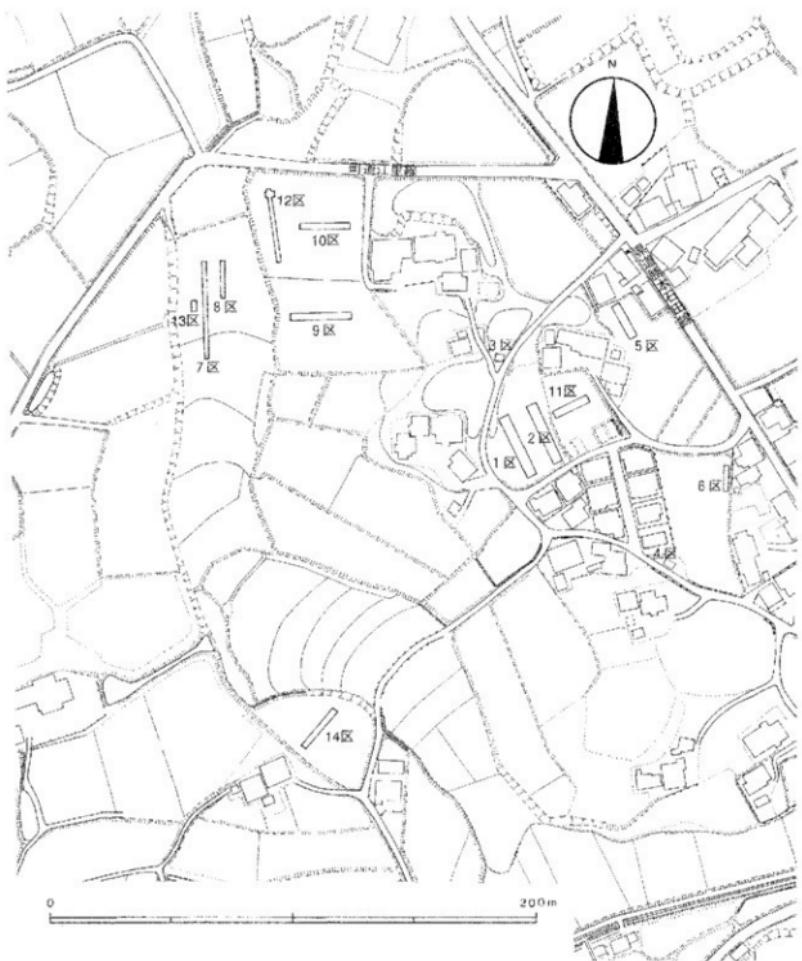
出土のサメカイト製石器である。つまみ上端には自然面を残し、直下は河側から打ち欠き挿りを入れている。うすく渦曲した横剥ぎ剥片を利用しておらず、周縁全体を両方から剥離して刃部をついている。形状は楕円形を呈すると思われるが、一部欠失している。6・7ともに縄文時代の所産と考えられる。

3. 原ノ久保地区の調査

(1) 調査概要 (第18図)

原ノ久保地区の調査の目的は、平成8年度に実施した墓域が周辺にどこまで広がるか、また実際に遺構が残っているかを確認することである。先ず1・2区は290-2番地に2本の試掘 sondageを南北に平行して4m×25mの面積で入れた。2区の南側には昭和53年に試掘 sondageを1個所入れた地点がある。調査の結果、地山層は北から南へ傾斜しており、旧地形は削平され包含層は見られない。南側に黒い土が埋め土に混じり、弥生土器がわずかに含まれていただけであった。3区はさらに北側の空き地に3m×3mの面積で入れたが、ここにも包含層は削平されていた。5区は平成8年度の墓域に一番近い所で10mも離れていない。しかし、ここも表土を剥ぐとすぐ地山層にあたり、遺構は無い。地山に石棺の抜き取り痕も見られないことから、この区域まで広がっていなかったと思われる。このエリアで遺構が確認されたのは327-2番地の11区である。前回の調査ではE区とした試掘 sondageから須彌式の土器と浅い溝が確認されている地点である。今回はその北側に設定した。西側は浅くして地山がのぞき東側へと深くなっている。試掘 sondageの中央あたりで表土直下から合14小児埴輪墓が1基出土した。深くなったり東側では暗褐色の包含層が認められ、土器片と板状の石棺材の破片が散在している。土器の形態から時期的には弥生中期後葉から後期後葉までが考えられる。平成8年調査の墓域の南東部は、現在住宅地になっているが、それ以前の畠の時には後漢鏡を探集したり、弥生終末期の埴輪墓が露出していた地区であるが、その南側の元住宅地に4区を5m×10mの面積で設定した。しかしこの区は、瓦結土を取るために大きく削られ客土されていたが、その上中よりガラス玉が8個採取された。他から持ってきた土かどうかは不明である。6区はさらに東側に設定した。ここは瓦焼窯が隣接しており、地山まで搅乱を受けていた。

7区から14区は、現在の住宅地から離れた西側の現水田に設定した。町道江里線が大きくカーブした地点に北から南へ向かって谷状地形が走り、古い地図では狭い水田が階段状に形成されている。この入り組んだ地形に7区を1m×40mの面積で設定した。現在の水田は新しく造成され、埋め土が1m以上堆積し、その下に漆黒色の土層がある。客土する前の水田は、田植えするのに苦労する程の深田で、泥炭に近い層である。地山層まで掘り進めると溝状の遺構と思われるものが検出され、弥生土器の小片も漆黒色の土層からわずかに出土した。溝の方向を確認すべく、東西に13区と8区を設定したが、7区の溝に續くと考えられる遺構は検出できなかった。谷状地形の東側の標高13mの315-4・7番地に9・10・12区を設定した。ここからは石棺墓1基と小児埴輪墓1基が検出された。他にも土器の集中が見られ、遺物整理の過程で小児棺と考えられる壺も復元された。この水田の谷を挟んだ西



第48図 原ノ久保地区調査区域図（1/2000）

側では昭和54年の範囲確認調査で、漆と若干の弥生土器が出土している。さらに平成7年の町道拡幅に伴う調査では、箱式石棺墓と考えられる抜き取り跡が4個検出されているが、時代の決め手となるものはない。この区域からは、かつて石棺、漆棺墓が出土したと言われており、漆の存在も含めて、今回調査した墓域とも関連があると思われる。

(2) 土 層 (第49図)

原ノ久保地区の基本土層は11・12区の上層区に示したとおりである。1層は表土層、2層は整地した時の埋め土で耕作土にもなっており、褐色を呈している。3層は暗褐色粘質土で有機質を含んだ、固くしまった層になっている。弥生土器を包含しているのもこの層である。4層は褐色土層で、ややふんわりとした層で旧石器を含んでいる。5層は地山層で部分的に掘っているが、黄褐色粘質土層で4層より黄色味が強く粘質も強い。8区は浅い谷状の水田に設定した。この地形の水田は深田で出植えにも困ったという。最近はそれを解消するため改良を行い、1m以上の客土がある。従って1・2層は2次的な堆積である。3層は灰褐色土、4層は暗灰褐色土であるが、上下関係はなくブロック状に認められる。5層は真黒な土で粘質が強く泥炭質に近い。一部自然木なども含まれる。6層は斑状黑色粘質土層で黒色をベースに灰色粘質土が斑状に入る。この層からわずかに弥生の土器片が出土している。地山層は9層で青灰色の粘質が強い層である。この区では2箇所に溝状のものが見られるが、人工的な感じはしない。この落ち込みには8層とした漆黒色の上層が堆積している。7層とした漆黒色土層はブロック状に入っている。7区から西側に4m離れた13区では黒色の粘質土層は見られず、浅い地点で褐色のやわらかい岩の地山層が見られ、谷のヘリの部分にあたる。

(3) 遺 構 (第50・51図)

原ノ久保10区出土小兒甕棺墓 (第50・52図1・2)

10区の暗褐色粘質土層から褐色粘質土層を掘り込んで出土。須玖I式の二つの甕を合わせて使用している。長軸は南西方向に向けられ、両方ともほぼ完形である。第52図2は下甕でほぼ水平に置かれている。口縁部は逆L字形で外側端部は丸くおさめられ、内側にわずかに凹みをもち尖がり気味におさめられている。胴上部に最大径をもち、底部はあげ底になっている。外側はハケ目調整されているが、かなり摩耗している。胎上には石英を多く含み、白い砂粒も見られる。高さ35cm、口縁外径28.6cm、最大胴径27.8cmを測る。色調はにぶい橙色を呈する。なお水抜きの穿孔は認められない。1は上甕で下甕よりひと回り小さい。口縁部は平坦部がやや凹み内傾している。下甕と比較すると口縁の幅と厚味が大きい。外側口縁の一部に6個の刻目が幅1.5cmの幅で施され、直下はナデ調整され、断面三角形の貼り付け突帯が一条巡る。胴部から底部にかけては丁寧なハケ目調整が施されている。器表面にはススの付着があり、内側の底部近くには黒い付着物が見られる。底部は上げ底である。色調はにぶい褐色で胎上には長石、石英、角閃石が含まれる。焼成は良好で、器高32.5cm、口縁外形27.8cm、最大胴径22.3cmを測る。

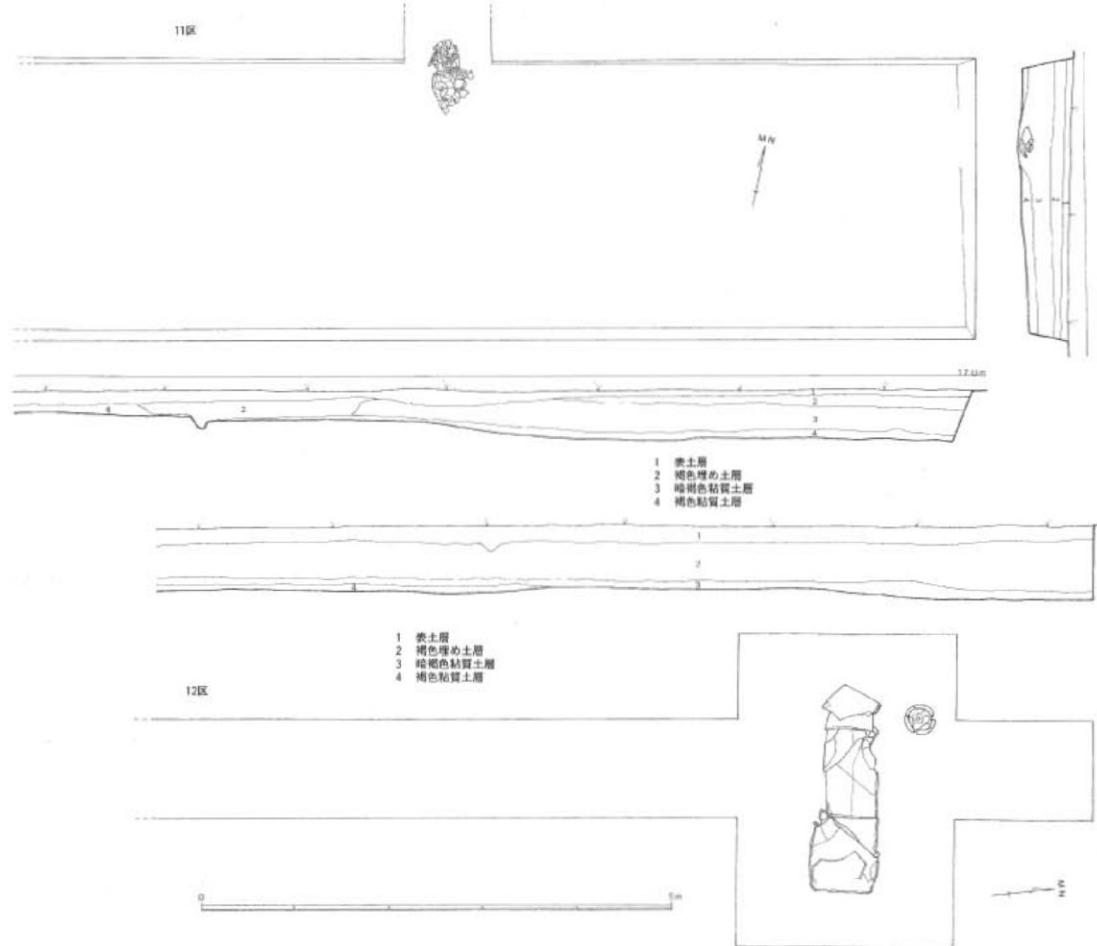


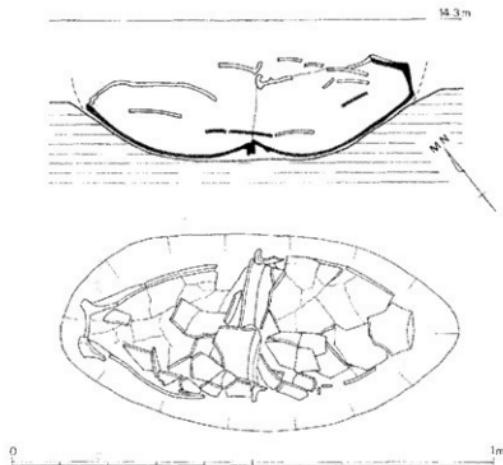
図49図 原ノ久保11・12区出土遺構及び土層 (1 / 40)

原ノ久保11区出土小児甕棺墓（第51・52図3・4）

10区出土の合口小児甕棺は、長軸を南西に向けて、10区出土の甕棺とはほぼ同じである。出土状況は上七が削平されており、耕作土直下からの出土であるため破損が著しいが、半分程は残存している。下臺の口縁部は内側から外に向って傾斜し、端部は丸くおさめられ、内側は尖っている。口縁直下はナデ調整され、一条の断面三角形の貼り付け突帯が巡る。最大径は胴中央部に位置し、底部は若干しまり平底である。ハケ目は全体に施されたと思われるが、底の方だけに残り大部分が摩耗している。胎土には石英と白い砂粒を含み、焼成は良好で色調黄褐色を呈する。器高は41cm、口縁外径34cm、最大胴径32.2cmを測る。上窓は下窓よりもひと回り小さい。口縁部は外側に僅き全体が丸味をおびナデ調整されている。直下には断面三角形の貼り付け突帯が一条巡る。外側はハケ目調整されていたと思われるが摩耗が著しい。底部はわずかに上げ底。器高は31.3cm、口縁外径30cm、最大胴径26cmを測る。胎土には白い砂粒や石英を含む。焼成良好で色調は明褐色を呈する。この甕棺は両者とも須玖Ⅱ式であり、10区出土の甕棺より新しい。

原ノ久保12区出土石植墓（第53図）

暗褐色粘質土から褐色粘質土にかけて検出された石植墓である。蓋石は長さ2.18m、最大幅0.62mで、5枚の板状安山岩が乗っている。蓋石は周縁が丁寧に打ち欠いて形が整えられ、ヨロイ蓋状に積まれている。蓋石を取り除くと、細長い長方形の土壙が握られ、長軸の両側に鏡板が対になった状態で立てられている。そして床面には頭部と思われる所に1枚の板石が置かれているだけである。中は一部空洞になっており、蓋石は南側に傾斜が見られた。状況から石蓋上墳墓とも考えられるが、2枚



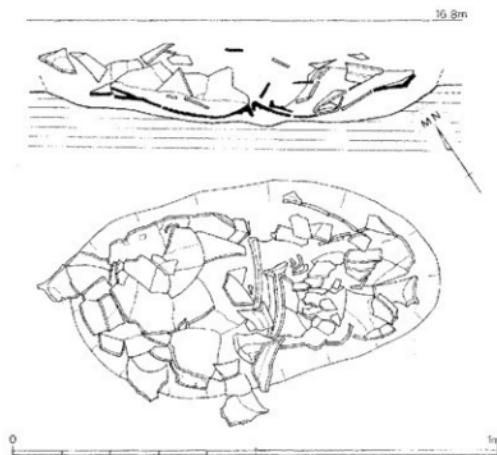
第50図 原ノ久保10区出土小児甕棺実測図（1/10）

の側板があることから、箱式石棺墓の変形とも受けとれる。副葬品は何も認められなかった。従って時期的なものは不明な点があるが、ただ、石棺墓の西北30cmの所から第53図1のように、丹塗高杯が出土した。逆になっており脚部は失われている。内外ともに丹が塗られて口唇部には暗文が施されている。口縁は外側に傾斜して内側は尖り錫先状を呈している。口縁直下外側には断面三角形の一条の貼り付け突帯を巡らしている。胎土には石英や雲母を含み緻密な仕上がりである。口縁外径は30.5cm、杯部の深さ8.5cmを測る。2も1のすぐ北側から出土したものである。口縁部は大きく朝顔状に開き、外側端部は方形状になり、わずかに凹ませ気味におさめている。頸部はほぼ直立して外湾するが、胴部にはM字の貼り付け突帯を一番出張った部分に一条巡らしている。底部はよくしまり平底である。外側には全体を丹で塗り、頸部には暗文を施している。内側は頸部から胴部上面にかけて丹を塗っている。非常に均整のとれた土器であるが、縦半分しか残存していない。胎土には長石、石英を含み、焼成良好。器高27.6cm、復原口縁径31.2cm、最大胴部26.9cmを測る。1・2の上器はいずれも弥生中期中葉頃であり、石棺墓に供獻した土器と考えるならば、やはり同時期が考えられよう。

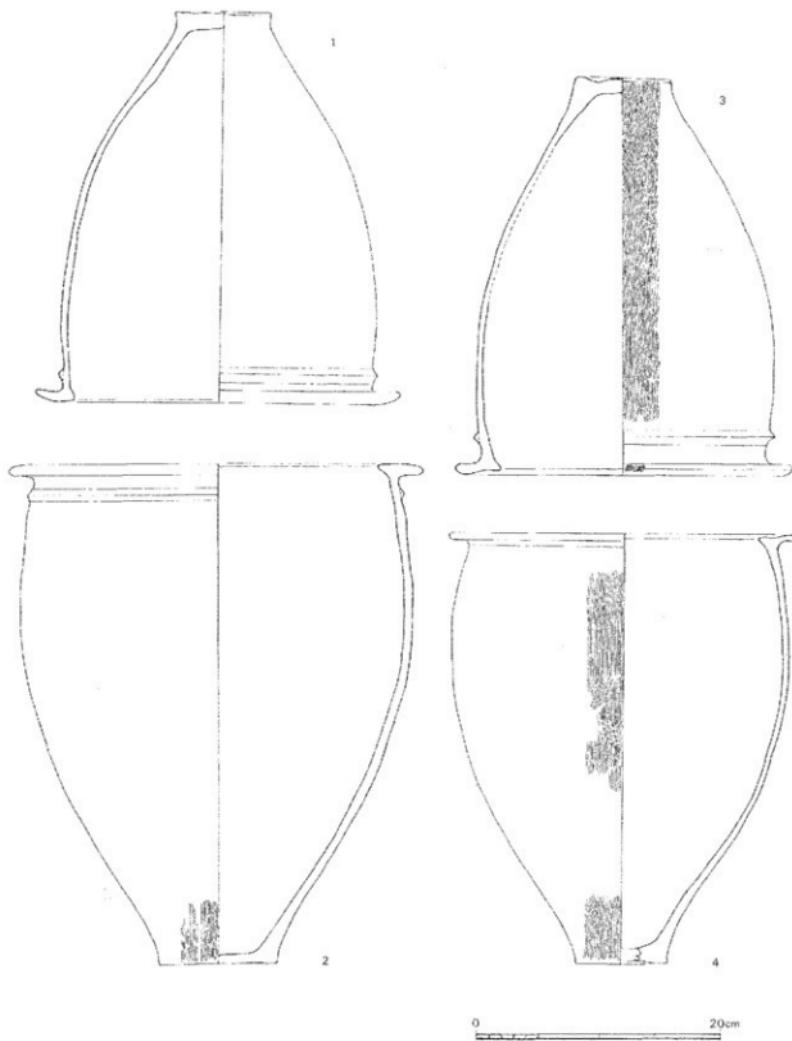
(4) 遺物

土器 (第54図1~15・第55図1~11)

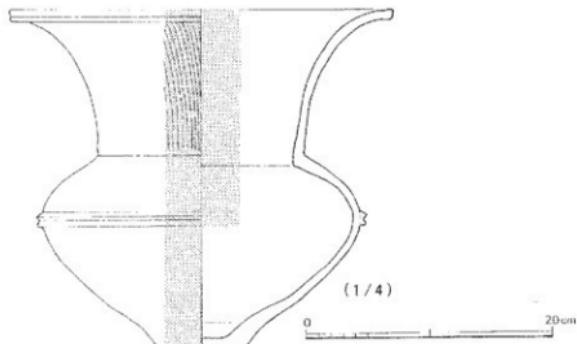
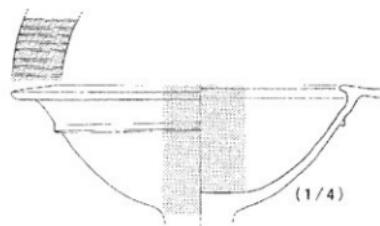
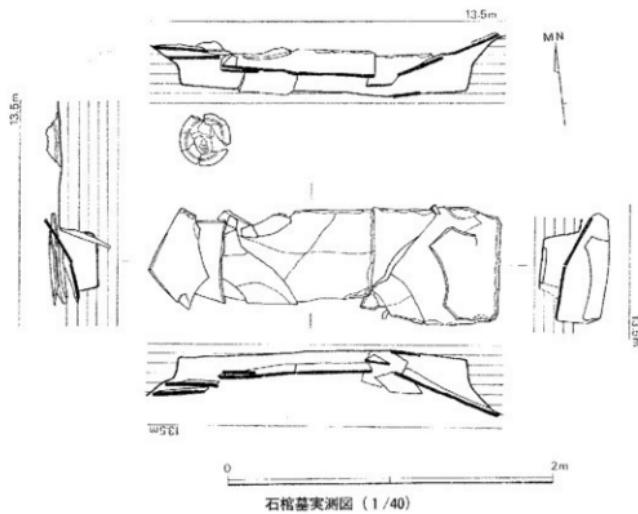
ここに図示した遺物はほとんどが10~12区出土の土器である。1は器形が鉢か壺かはっきりしないが、口縁は平坦で外側に丸くおさめられている。胎土には石英を多く含み、雲母も若干見られる。2~4は逆L字形の口縁平坦部が外側に傾斜し、端部が丸くおさめられた須玖II式の壺である。3



第51図 原ノ久保11区出土小児埴棺実測図 (1/10)



第52図 原ノ久保10・11区出土小児櫬実測図（1/4）



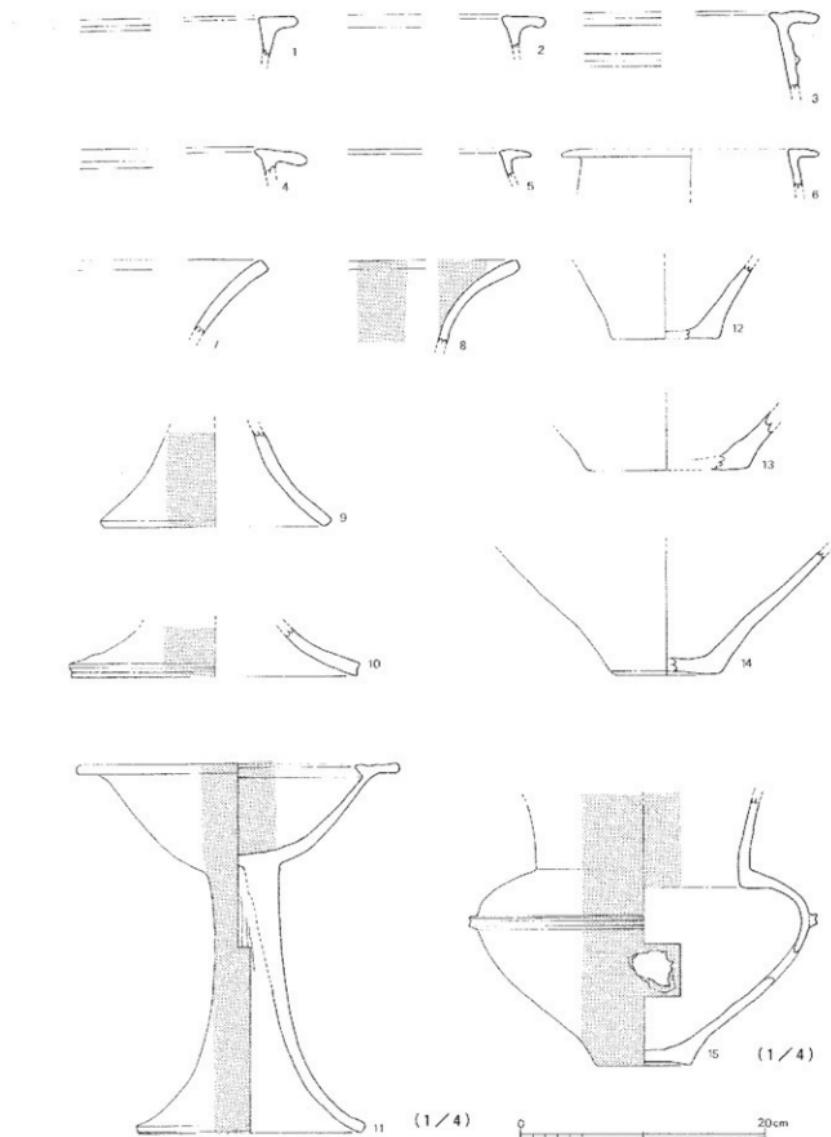
第53図 原ノ久保12区出土石棺墓及び土器実測図

は口縁直下に断面三角形の貼り付け突帯が巡る。4は口縁直下が直角に近いしまりをしている。胎土には石英、雲母を含んで焼成も良好である。5・6は小形広口壺である。器表が摩耗しているが、丹が塗られていたと考えられる。胎土には石英、白い砂粒、赤色粒を含み、焼成はやや甘い。7・8は広口壺の口縁である。8は外側に丹塗りが一部残る。口縁端部はわずかに凹んでいる。胎土には石英、雲母、白い砂粒を含み焼成は甘い。9・10は丹塗り高杯脚部である。胎土は精選された土で緻密である。11は丹塗りの高杯である。器高30cm、口径外径26.6cm、杯部の深さ7.3cmを測る。口縁は内側にやや尖がるようにおさめられ、わずかに凹みをもなながらほぼ水平に外側に伸び、端部は方形におさめられている。胎土には石英、白い砂粒、長石を含み焼成は良好である。12～14は底部である。12・13は兜、14は壺底部で、外側にわずかに丹塗り痕が認められる。15は広口壺軸用の小児墓棺である。口縁部分は意識的に欠かれたと思われるが、約縦半分が現存している。器表全体と口縁から頸部にかけての内側に丹が塗られている。胴部は大きく張り出し最大径の中心は上部に位置し、断面M字突帯を貼り付けている。突帯直下には径約3.5cmの水抜き孔があけられている。底部はあげ底で径8cmを測る。胎土には石英、長石、白い砂粒が含まれる。出土状況については、10区3の暗褐色粘土層からであるが、2次的に動いている。しかし第50図の小児墓棺も近くから出土していることから小児墓が複数存在していることが推測される。

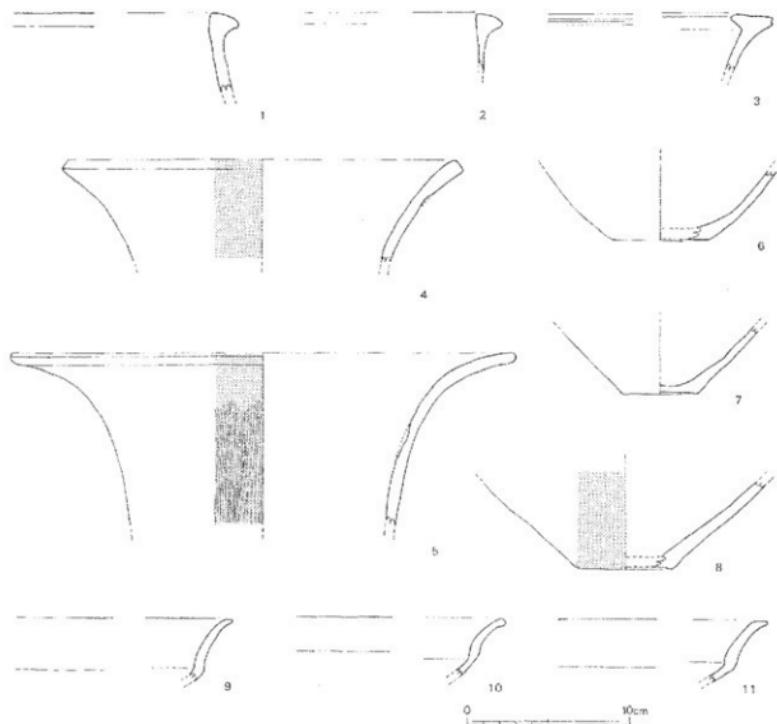
第55図1～11の上器は11区から出土した土器である。1は口縁部が外側に短く張り出し、断面三角形を呈する壺である。胎土は粗く石英、長石、白い砂粒、雲母を含み焼成は良好。2は小破片で器形が判断できないが壺の可能性も考えられる。胎土には石英、雲母を含み焼成は良好。3は広口壺口縁で内側に鋸先状に尖がり、口唇部は平坦で颈部に一条の沈線を入れている。胎土には石英、長石を多く含み焼成は良好。4・5は広口壺口縁で内外に丹が塗ってあるが、5は縦にミガキが施されている。口唇部は4が角ばっているに対し、5は丸くおさめられ、ともに朝顔状に大きく外反するタイプである。5の復原口径は31.2cmを測る。胎土は精選され緻密で石英、雲母を含み焼成は良好。6～8は底部。6は平底で立ち上がりから丸くふくらみをもつ。外側はミガキが認められる。器壁はうすく鉢状になると思われる。7・8は丹塗りの壺底部で、底はわずかに上げ底である。胎土は緻密で石英、雲母、赤色粒を含む。9～11は高杯の杯部である。口縁端部を丸くおさめ、頸部が内湾し、胴部がL字形を呈する。胎土には石英、長石、雲母、赤色粒を含み色調は橙色で焼成はやや甘い。原ノ久保地区出土の土器は11区が弥生中期後葉から後期にかけての時期に対して、10・12区出土の土器は弥生中期中葉から後葉にかけてが主体と考えられる。

ガラス玉（第56図）

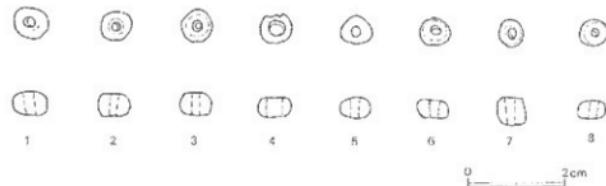
4区は原ノ久保A地区として調査された墓域の南側にあたる住宅地の中に設定した。発掘してみると、粘土を取るために全体が掘られ、その後に埋め戻されていたが、その埋め土中からガラス玉が8点採取された。いずれも径が5～7mm、厚さ4～6mmを測り、淡いブルーを呈している。おそらく、あまり離れていない地点から客土されたもので、弥生時代のものと考えられる。



第54図 原ノ久保10・12区出土遺物実測図 (1/3)



第55図 原ノ久保11区出土遺物実測図（1／3）



第56図 原ノ久保4区出土ガラス玉実測図（1／1）

石 器 (第57図)

原ノ久保地区でも広い範囲に渡って旧石器が出土している。1・2はナイフ形石器である。1は9区褐色粘質土出土で良質の黒曜石剥片を使用している。基部端部は丁寧な剥離を行い、両側も刃溝を行っている。刃部は斜行し、うすくシャープに仕上がっている。2は10区表土層出土。黒曜石を素材としているが、表面は灰黒色を呈している。長さ3.7cm、最大厚0.5cm、重さ2.12gを測る。刃溝の部分は厚みがあり刃の部分は1と比べると短くなっている。長さ3.7cm、最大厚0.7cm、重さ4.1gを測る。3・4は台形様石器、3は4区表土層出土で黒曜石を利用。基部を掏削から適度調整している。右側は直線に、左側は湾曲している。刃部の一部を欠失しているが、斜行するものと思われる。4は4区表土層出土。基部だけが残り刃部を欠失している。5は4区表土層出土。良質の黒曜石の厚みのある縦長剥片を利用した、尖頭状石器であるが、先端部を欠失している。基部には一部自然面を残し、未製品の感じもある。6~10は黒曜石製剥片類である。11はサヌカイト剥片で片面に自然面を残している。1区褐色粘質土層出土。12は玄武岩質の縦長剥片を利用。長さ13.3cm、最大厚1.7cmを測る。



第57図 原ノ久保地区出土石器実測図（2／3）

IV まとめ

平成12年度国庫補助事業に伴う範囲確認調査は、芦辺町域で実施した不條地区的調査で弥生前期末から中期初頭にかけての溝2条や、中期前半の土壌、柱穴状小穴群、中期後半の土壌などを検出している。これらの遺構は平成10年度船着き場付近水路等状況調査で確認したもので、丘陵北西部低地の遺構の抜がりがさらに鮮明になった訳である。しかも旧河道に囲まれた微高地の住居域と考えられる部分や、前期末から中期初頭にかけての溝は生活や農業用排水路と考えられることも分かってきた。

そして遺物も前期末の土器をはじめ、石庖丁、石鎌、石劍などの石器の出土は、住居域が確実に捉えられる資料となつた。この地区ではこの他にも調査が進められており、新たな知見が加わってきてきている。

石田町域の調査ではこれまでと違つた新たな発見があった。大川地区の濠の検出である。方向性からして新たな濠といえる。時期的には土器から見る限り、弥生中期を通じて利用されていたものと考えられ、後期には完全に埋っていたものであろう。ただ濠の性格については防御目的か区画性をもたせるものか不明であり、明らかにすることが今後の課題である。

原ノ久保地区では平成8年度調査の墓域が拡大することが期待されたが、住宅地の開発や畑地の造成などにより、消滅している部分も多くあることが分かった。11区では、南側の前回の調査区から弥生中期の遺物が出土していたが、今回は合口小児窓棺が検出され、墓域の範囲が拡がる可能性もでてきた。10区、12区では石棺墓と合口小児窓棺墓が検出された。石棺墓に副葬品は無く時期の決定は出来なかつたが、周囲の土器の出土状況からして、中期中葉から後葉の時期と考えられる。また同時期の出土土器を見てみると、丹塗り土器が多く見られ、墓域と密接な関係にあると考えられる。

一方、浅い谷状地形を備て西側水田では、昭和52年から54年に実施した確認調査で濠が弧を描きながら東西方向に伸びていることが判明し、さらに聞き取り調査で、濠の内側にはかつて耕作のおり、石棺、窓棺等が出土したことが知られていた。その後平成7年の町道江里線拡幅工事に先立って行われた調査では、濠の内側から石棺の抜きとり痕で4基あったことが確認されており、この区域との関連性も追及する必要がある。さらに濠の方向性については、平成8年度の調査で検出された池田大原1区の濠と繋がるのかどうかの検証もする必要がある。



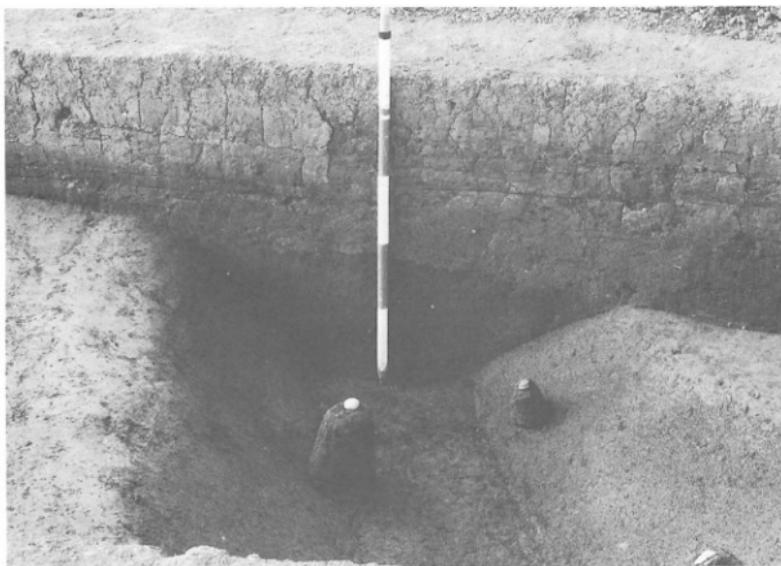
大川 8 区漆検出状況



大川 8 区漆北側土層



大川 9 区 濟検出状況



大川 9 区 濟東側土層



原ノ久保10区西側土層



原ノ久保11区東側土層



原ノ久保11区遺物出土状況



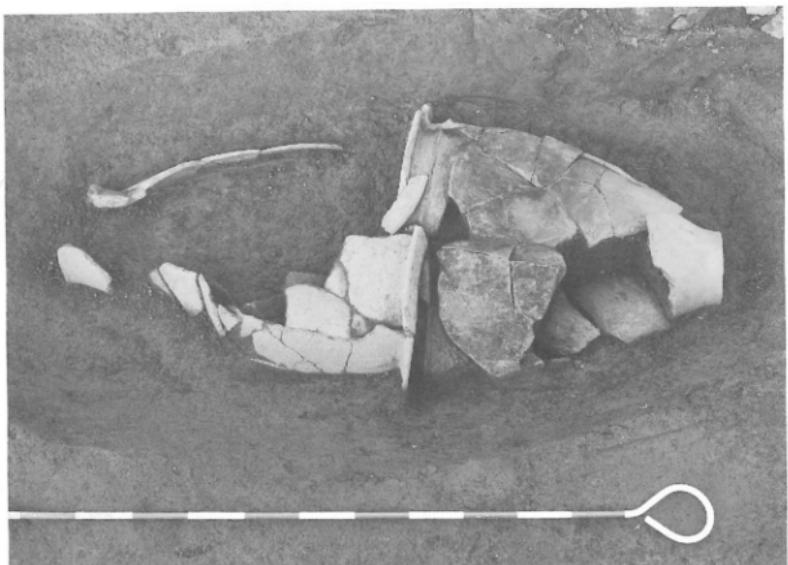
原ノ久保12区遺物出土状況



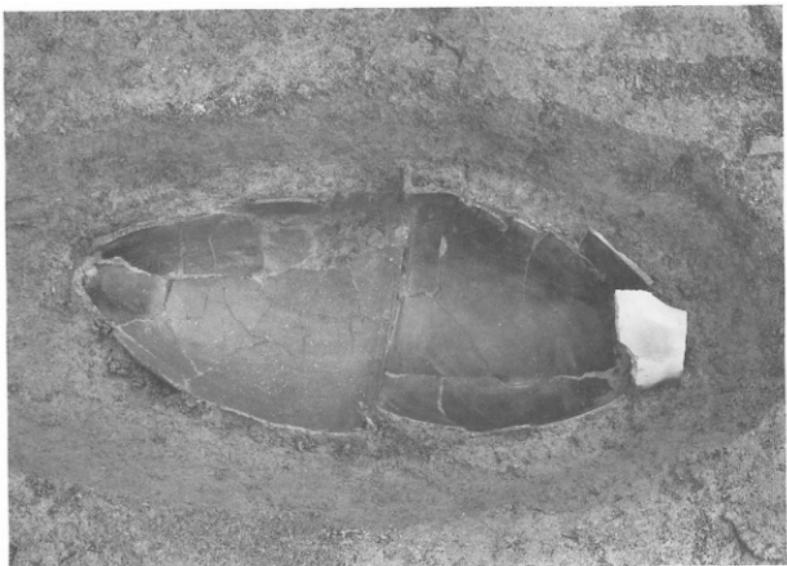
原ノ久保11区土器出土状況



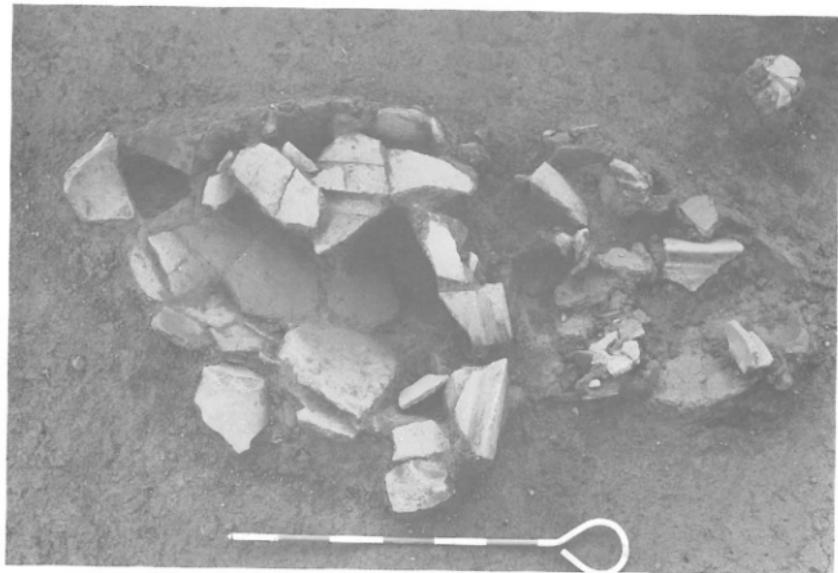
原ノ久保 7 区溝検出状況



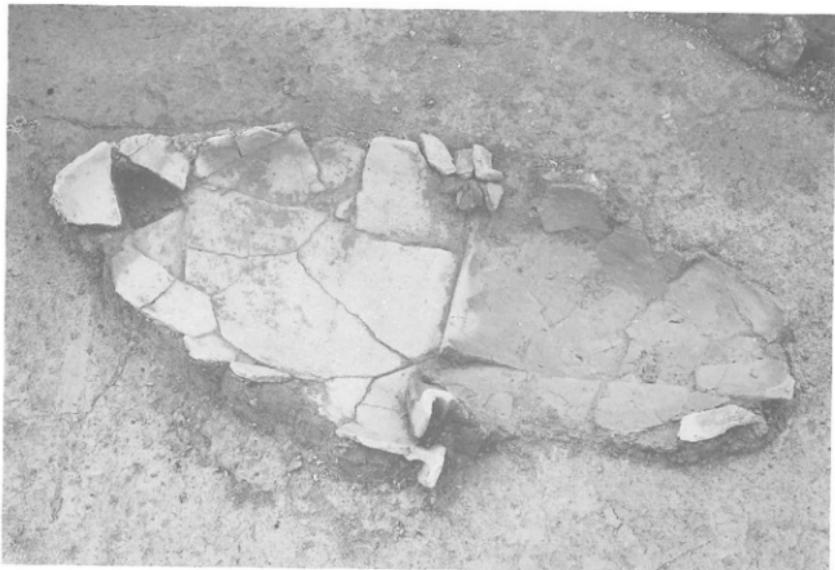
原ノ久保10区小児葬棺墓出土状況（上面）



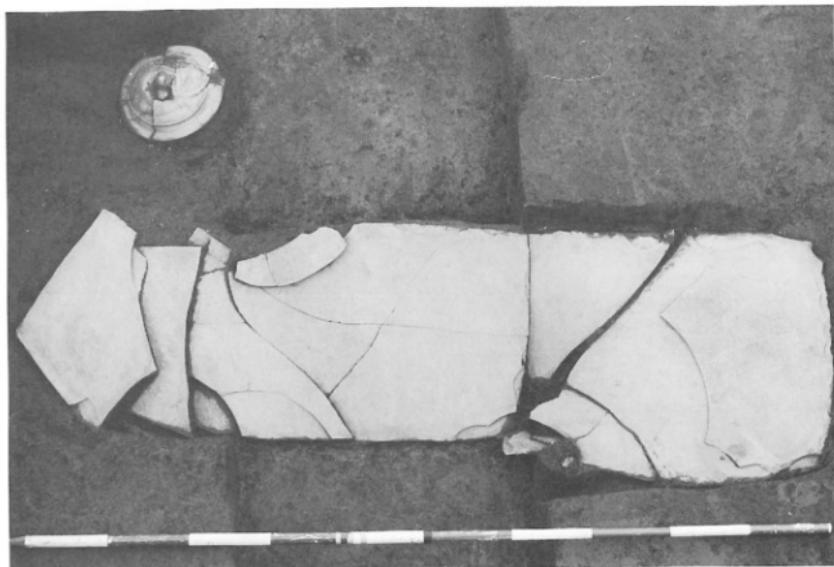
原ノ久保10区小児葬棺墓出土状況（下面）



原ノ久保11区出土小児埴棺墓（上面）



原ノ久保11区出土小児埴棺墓（下面）



原ノ久保12区石棺墓出土状況（上面）



原ノ久保12区石棺墓出土状況（下面）



大川 8 区遺物出土状況
(手前は濠上面)



原ノ久保 8 区土層



大川8区添調査風景



原ノ久保11区添調査風景

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき						
書名	原の辻遺跡						
副書名	原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書						
番次	III						
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書						
シリーズ番号	第22集						
編著者名	安楽 勲・町田 利幸・藤村 誠						
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所						
所在地	〒811-5322 長崎県佐世保市芦辺町深江鶴亀触1092番地1 TEL09204(5)4080						
発行年月日	西暦2001年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
原の辻遺跡	長崎県佐世保市 芦辺町・石田町	42423 42424	73-10 72-92	33°45'24" 129°45'4"	20000508 ~ 20010117	1,347m ²	原の辻遺跡 発掘調査事業 (国庫補助事業)
取締遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
原の辻遺跡	集落墓地	弥生時代 古墳時代	濠・溝 土壙 墳塚墓 石棺墓	弥生土器 朝鮮半島系土器 打製・磨製石器 ガラス小玉			

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集

原の辻遺跡

2001. 3. 31

発行 長崎県教育委員会

長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂印刷